

「はふりめく」

厳選十話

制作：白川学館

目次

第七種神拝作法伝授での七沢代表講義

- ◇入門講義としては、17回目ということ
- ◇まず、第七種入門ということになるわけですが
- ◇器というもの、自然のすべてを神と見立てる
- ◇次に、第六種鎮魂、そして第五種：
- ◇第四種を授かって、初めて大祓を会得して
- ◇白川がやっていた祭祀の自身
- ◇柏手の無い作法もあるわけです
- ◇【「第七種神拝作法」に関する説明】
- ◇はふりめく0032話 2017年1月10日
- ◇器の教え
- ◇言葉によって生かされる
- ◇命名権が、神から人間に与えられた
- ◇意志のエネルギーが充ちている
- ◇宇宙が曼荼羅状に出来上がっている
- ◇はふりめく0051話 2017年2月3日
- ◇和魂にまいたまということを中心に考えて
- ◇荒魂あらみたまの発動が大事な時代
- ◇はふりめく0110話 2017年5月1日
- ◇一日は船出、大海原に出ていく
- ◇四種の祓いの中に三種の神器の精神が：
- ◇人間としての大切な権能が鏡に映る
- ◇剣は自己と他者の存在を明らかにする
- ◇はふりめく0141話 2017年6月18日
- ◇大祓の根拠
- ◇国を守る方々に挙げる大祓
- ◇南半球と北半球の鎮魂
- ◇人類が続いていくということを試される時
- ◇はふりめく0148話 2017年6月26日
- ◇網の文明
- ◇テーマは、「何が楽しいの」
- ◇ネット文明は網の文明である
- ◇はふりめく0142話 2017年6月18日
- ◇無限の時空間を超えた力を発揮していく言語
- ◇お祓い、大祓でエネルギー場を働かせる
- ◇はふりめく0179話 2017年8月7日
- ◇我々は膨大な数の先祖と繋がっている
- ◇自分自身が神である。
- ◇国津神
- ◇天津神をお迎えするということは
- ◇順番がある
- ◇はふりめく0235話 2017年10月15日
- ◇錐体路系から錐体外路系の脳に切り替えて
- ◇共振、共鳴の手助けをする意志装置
- ◇自らの結界を一方で守りながら、
- ◇はふりめく0262話 2017年11月14日
- ◇きっと、いろいろな結びが起こって
- ◇はふりめく0141話 2017年6月18日 36
- ◇はふりめく0110話 2017年5月1日 31
- ◇はふりめく0032話 2017年1月10日 21
- ◇はふりめく0051話 2017年2月3日 28
- ◇はふりめく0142話 2017年6月18日 47
- ◇はふりめく0148話 2017年6月26日 41
- ◇はふりめく0179話 2017年8月7日 51
- ◇はふりめく0235話 2017年10月15日 56
- ◇はふりめく0262話 2017年11月14日 62

◇死返玉まかるかへしのだまという技

◇十種の神宝というものは

◇人類のために清めてみたい

◇平・安・清・明という単純な言葉

◇お祓いあげながら昇っていく

◇鬼神を動かす、直感実験というようなもの

はふりめく0383話 2018年3月14日

◇祓戸四柱の神のご修行

◇身体が神の社

◇天地空、赤と白と黄色の三色の色

◇緊張をほどく

◇体を動かして緊張を解く

◇神器を通じて神様を知る

◇神を迎える

◇白川門人は誰でもなれる

◇竜巻の中に神を見ます

第七種神拝作法伝授での七沢代表講義

【七沢代表】

こんにちは、七沢でございます。暑い中、ありがとうございます。白川の伯家の伝えと申うんでしようか、これは本当に、1000年とか、あるいはもつと前は、大中臣とか、中臣、藤原一門、白川と……。白川が出来ましたのも、花山天皇以来の悲願で出来た道と言いますか、教えなんですけど、やはり一子相伝ということで、中身が、正確に伝わってきたのかどうかということも、今となっては分からないと言いか、そんなところもあるのかも知れません。史実、あるいは歴史の中で忠実に再現する工夫をいたしまして、もちろん、明治の混乱の時、色々とありました。高濱清七郎先生も、西の方に下らないといかないこともありまして、もし高濱清七郎先生が、何処かで亡くなられていたら、たぶん、これは明治の時に終わっていたかもしれません。神道も、明治維新から20年位、色々と工夫して悩んで、今の神社神道という制度の体系になったわけでありました。

元々、白川というのは作法的に言いますと公家の作法で、有職ゆうそくというものの一つなんです。白川の神拝作法というのは、有職という公家の作法ということになるんですね。神様を拝する作法ということになるのですが、その中でも、一子相伝ということと伝わった中身ということになります。ですから、正確に、それを再現するということは、この150年間でも、諸先生、諸先輩方が苦労されて残されてきたものと言いか、途中で何度か、明治の始めになる前にも、そういう意味では、危機と言いますか、伝えが危機に瀕することもあったわけでございますけれども、奇跡的に伝わってきております。これは、

本当に幸いだっただなと思うんですが、この内容が何処まで正確であるのか、あるいはそれが何処まで真つ当な教えかということが問われるところではあるうかと思えます。

もちろん、神道というのは、△言挙げせず▽という考えで、はつきりとモノを言うことを、仏教と混じり合う、あるいは違いを明確にする時に、「神道とは、こうです」ということを、言わざるを得ない、あるいは混ぜて、新しい時代の考えと合わせて、こういう風なものではないかという主張したいことが、多分何度かあったと思うんですね。現代で、少なくとも祓い、あるいはご修行という実践の形で伝わって来たものを学習方法として、正確に伝承出来る方法は、システムの学習法ではないのかということでお教えさせていただいております。たまたま私が、コンピュータソフトの開発に関わっておりますから、今から、50年くらい前に、初めて、日本に入ってきたシステム学習という学問を触れておりましたので、この白川もシステムの的に、それを解析して、学習を楽に、だれにでも学べる科学として、お出しできればいいなというような願いがありました、その工夫に携わっていただいたと言いますかね。高濱浩先生から、あるいはそのお姉様の安見晴子先生から、学ばせて頂いた40数年の中で、そのご修行と研究に没頭させて頂いて、白川のシステム学習というものに結実してきました。

◇入門講義としては、17回目ということ

ですから、17という数字は、伊邪那岐、伊邪那美の神様が、ちょうど、古事記の中では、出現された順番ですね。18になると、一筆現象と言って、すべての存在が図形的に始まるという言い方があります。古神道の言霊という世界では、いよいよ、子音が生まれ始まる現象数と言うんですかね。18番目〜50番目で50音が完成する。その子音の開始というのが、18からということ、17というのは、その伊邪那岐、

伊邪那美の子産みの手前のところまで、いよいよ来たかなと。取って付けたような話をするわけでありませんが、もちろん、白川の学習が、入門講義を17回繰り返し返して、いよいよシステム学習も、もう不易というか、そんなに変わらないと言うか、そういうものとして皆様方にお伝えできるのではないかな、ということが言えるのではないかなと。ある面では、自信と言いますか、科学として、それが学習法として、これだったら、受け入れていただけるのではないかとこの辺りまで、来たかなというように感じております。

今まで、多数の皆様方に、関わって頂いて、それがようやく完成してきたということなんですが。なかなか難しいと言うか、もちろん、入門という意味での第七種ということですけども、白川では、伝授の呼び方が、第十種から、第三種、第二種、第一種と下がってくるんですが。全体で十種類あるわけです、それは、一つ一つ境地を確認していかないと、簡単に、天皇陛下が学びになったり、皇太子が学ばれるようなところ、あるいは高等神事という風な高度な神の神事というところまでは、なかなか行かないわけでございます。そういうものを無理にしようとする、神事、高等神事で、必ず出て来る霊や人の言葉みたいなものに左右されたものになってしまいうわけですね。祝の神事なんてことを、自己宣伝のために、安易に使う人達もおりますけれども、それは、とんでもない間違いであります。これは、はつきりと、第十種から第三種あたりまでは、しっかりと学ばないと、こういう神事の「し」の字も言うことは出来ないわけです。その辺りは、古法に基づいた、非常に厳確な体系を持っているものであります、神という存在に、人が繋がると言うのか、それはやはり明確な階層と言いますか、天津神と言いますけれども、あるいは国津神、あるいは遠津御祖神という風な順番があつて、一つ一つをしっかりと学んでいかないと出来ないものでございます。

◇まず、第七種入門ということになるわけです

さて、学んでいく上での注意点と言いますか、如何にシステム学習で、誰にでも平等に学習できるとしていただけますけれども、やはりそれでも、若干、早い、遅いというのは起こることは否めないわけです。そういうこともありますが、まず第七種入門ということになるわけです。皆様方が神社にお参りする時の、その二拍手ですね、これは、明治になって、殆どの神社で共通化されて、二拍手をするようになりましたが、じつは、二拍手も2種類あるんですね。

顔の前で一回、胸の前で一回拍手、第九種神拝作法「降神の拍手」のと、胸の前の同位置で、二回拍手、第八種神拝作法「昇神の拍手」の2種類があるんですね。

今は、皆さん方が、神社に行かれる時には、普通に、胸の前で二拍手されますが、じつは、白川で言うと、昇神と言って、神様にお帰り頂く拍手で、最初の挨拶が、行った先から「お上がりください」という風なことになっちゃうんですね。だから、本当は、第九種神拝作法・降神として、この場にお迎えするという作法が、第九種としてあるんですね。それを明治になって、簡単にしてしまって、みんな第八種神拝作法・昇神になっちゃって、もちろん、どの神様にお参りしても構わないんですが、その神様のおられる社に繋がってくださる神様もいらっしやるんですね。ですから、神社に行って、すぐにパンパンとやっても繋がるものでもない、と。ですから、そういう神様がいらっしやるんですね。手置帆負神たおきほおいかみ様とか、彦狭知神様ひこさちのかみに、まずは神社の主祭神である神様にお繋ぎ頂きたいということをお願いするわけです、お参りする前に。

本来は、神様にお参りする時の、その上で、そういう作法が、ちゃんとあるんですね。ですから、第九種、第八種、第七種があるんですね。白川は、神官の皆様には神拝作法を教えていました。これは、私の先祖も、江戸時代ですけれども、京都の白川家に行って学んでいて、富士登山も自然文化遺産になりましたけれども、御師達に教えるという仕事をやっていました。白川の作法というのは、神主さん達に教えたので、それ以外には、教えていなかったんですね。だんだんと吉田神道が盛んになっていって、白川の退潮が著しくなって勢力の温存の為に、次第に教えるようになったと聞いております。神官に教えるので、入門が、じつはこういう四拍手と言いますか、後ろ手でこういう風に打つんですね。後ろ手で打つなんてことを、近江八幡という神社で宮司をなさっていらした横井時常宮司が、40年、もつと前ですかね、中村新子先生が白川の「おみち」を伝えられて、昭和20年代には、神道の最後の修行とすることで、石上神宮でも教えられたこともあったんですが。その教えを受けて、その横井宮司が後ろ手を打ったら、神社界から、総スカンを食らってしまったわけですね。

一時期、近江八幡でも、その白川の「おみち」を教えていた時期もあるんですね、中村新子先生が。藤原家の直系の子孫の方々や、日吉、あるいは椿、春日、という大社の神官の皆様にお伝えされていたこともあって、私は、本来自、そういう皆様によって頂けるものというか、神道の方々によっていただけると思っていたんですが……。結局、神官でない私に回って来ることになってしまった部分もあるわけですね。今は、斉藤さんにやって頂いているので、お伝えしているわけですが。本来は、神官の方々にお教える作法ということでの、第七種入門ということでございます。その打ち方も、後ろ手を打つというところでございますけれども、この後ろ手を打つという柏手が、非常に大事な意味を持ってまいります。現在の科学と言いますか、そういうものとも深い関わりがございます。

それは、どういう事かと言いますと、DNAということですね。今の科学というものは、山中伸弥先生のiPS細胞ではありませんけれども、普遍的な科学として、DNAの問題というのは、今の時代の中で覆しようのないところまで、科学として認められてきたものがDNAという概念、そういう科学ですね。遺伝子工学とも言いますが、そういう工学的な知識を元にして、再現するということが可能になったわけでありませぬ。これは、皆様も、よくご存知のところでございますけれども、そういうDNAの問題と、どう絡むのかと言うと、先祖ということですね。これも、もちろん今の段階では、色んなDNAの研究が出てきておりますから、言語遺伝子FOX P2というもので、今は出てきておりますが、私達が、少なくとも体遺伝子として受け継いだものは、これは先祖の一つの、もちろん、お父さん、お母さんとも、また違うものが存在しているんですが。ホモ・サピエンスとしての人類が、一つの共通のものとしては、体遺伝子ということになると思うんですね。46とか、昔は、染色体と言われておりましたが、そういうものを受け継いでいるということ、少なくとも、ネアンデルタール人さえも取り入れた、我々、ホモ・サピエンスは、そういう遺伝子を持っているわけですが。その遺伝子というものを、否定するわけにはいかないと、ここまで来ていますが、この白川の神拝の第七種というのは、まさにそれを後ろ手で打って、遠津御祖神とつみおやのかみという風に、表現するわけですね。

普通は、神様をお迎えするのは、前の方ですよ。正面でお迎えするのが筋で、後からお迎えするというのは、普通ではあり得ない感覚だと思えます。ですから、要するに自分自身に打つ柏手ということになります。ですから、自分自身が、じつは神なんだということなんです。これは、神道の一つの極意でもあると言うか、亡くなったら、成仏するという、非常に修行した人は、密教の「即身成仏」という言い方もありますが。親鸞さんなんかは、「南無阿弥陀仏」と一度唱えれば、それでもって成仏する、

仏になるという教えもございませぬ。そういう真宗の仏教にあるようなものと同じ様に、神道もみんな亡くなれば、神になる、と。ただ、子供が亡くなった時には、童子とか、そういう言い方も、仏教にもありませんが。神道では、命みことという、「○○の命」という様な形で、それが、命から、段々と、尊みことという様な、尊みことになったりして、神になっていくと言うか、亡くなってからも、神になる順番も有るにはあるんです。が。例えば、防人で亡くなった方は、最初は英霊という言い方もありますが、神になられるわけですね。そういう先祖、あるいは人間というものが、神になるという考え方が神道であるわけですね。ですから、後ろ手で打つという事は、自分自身に対しても、打っているということでもあるわけです。自分自身が自分自身に対して、神として打つ柏手でもある、と。

◇器というもの、自然のすべてを神と見立てる

もちろん、我々は、遠い先祖、何億、何十億の先祖がいるわけですが、そういう存在に対して打つ、と。その両方を兼ねている柏手が、第七種の天津神あまつかみ、国津神くにつかみ、遠津御祖神とほつみおやのかみ、産霊幸倍神うぶすなまきまほのかみという柏手になるわけですね。その辺が、いわゆる、神という存在が何か、外にあるというだけではなくて、外から来ることもある、中と言うか、自分自身の中から出て来ることもある、と。元々、神道は、自分よりも何か優れた存在というものを、それは、もちろん水もそうですね、あるいは、この入れ物も、じつは神になるわけです。器というものも神と見立てる。もちろん、自然のすべてを神と見立てる。そして、その名前も有ると。今、神名辞典しんめいというものを作ろうとしてやっておりますが、1万くらいの神の用語というものがあるんですね、神様に関する用語というものが。

ちょうど、水を上げたので、水を飲んだ方がいいかなと。ちょっと、すいません、この様に、お水に助けられるわけです。「人間の身体の中は7割がお水で、脳は92%がお水だ」なんて言っていますけれ

ども、水も、神様ですね。弥都波能売神みすはのめのかみという風に呼びます。そういう沢山の神様というものの存在があるんだと。ですから、多神教という言い方もありますが、そういう意味では、神道で言いますと、神という存在は、一つの宇宙だけではなくて、創造もそうですが、一つ一つの働きという風に捉えられるわけですね。

人間が、自分自身で働いていると思っっている、その細胞の一つ一つも含めて、すべて、ある面では自分の外にある、と。自分の意識の外にある存在物かもしれない、その働きによって、生かされているのが人という意識、概念、あるいは存在なんだと。そういうところが、神道の中にはあるのではないのかなと思うんですね。先程の遠津御祖神という存在を、最初の我々が、もちろん自分自身もそこに入るわけですが。子供さんから見れば、自分の生きた先祖になるわけですね。立場の問題ですよ、1人称、2人称、他人称ということも、言語的、文法的には、そういうことになりますけれども、そういう一つの存在としての人というものを今の科学の中で、そういうDNAというところを核にしていくと、その最初の人というものが、神であるという段階が見えてくるのではないかとことなんです。この際、神の階層というものを、少しお話させて頂くと、この後、自然というものが、じつはこの水も、最初に水ですね。人間の7割が水という風に言われておりますが、その水というもの、真水は地球上に少ないですが。今、水というものの物理学的、あるいは歴史的、あるいは神道的、あるいは水というものが社会でどういう風に使われるのかということとかの本を400ページくらいになるんですがつくっております。もう殆ど出来ておりますので、来月には皆様方に、是非、読んで頂きたい本が出来上がります。その中にも、神道のことや沢山ありますので読んで頂ければ幸いです。これが、『Water Design』とごう名前の本になります。

まさにこの宇宙というのは、水のデザインで創造されているのではないかとこのころが、一つの結論的なところとして、表現できるような本になっていると思うんですが。この木火土金水ですね、五行という言葉もあります。もちろん、自然の中は、空もあれば、風もありますが、特に、易経と云うんですかね、易経から変化した、陰陽五行という、一つの哲学思想もありますが。そして、五行は、非常に、白川では、よく使われておるわけです。ですから、木火土金水ですね、そういう五行のそれぞれに神の名が付けられているわけです。

水は、みつはのめのかみ弥都波能売神、火は、ほのかぐつちのかみ火之迦具土神、金は、かねやまひのかみ金山毘古神、かねやまひめのかみ金山毘売神、土は、はにやすひのかみ埴安彦神、はにやすひめのかみ埴安姫神、木は、くくぬちのかみ久久能智神と。そういう五行という存在の一つ一つに、名前が付けてあります。また、その一つ一つの五行を迎えて、我々が一つになるといふか、その神を迎える作法と、その実感というものがあつたわけですね。遠津御祖神も、実感する方法が、じつはあるんですね。そこら辺りが、誰でもがしっかりとこれから、それぞれ第七種入門では、その体験が前提になっていることですね。皆様方は、遠津御祖神と一つであるということが、前提であるから、大丈夫なんですね。それでもなお、今度は、自分からご先祖の神と一つになる作法というものもあるんですね。それを体感する方法がございます。これは誰でもが出来るし、誰にも言われなくても、同じ体験をするということが有るんですね。これが白川の特徴ですね。

◇次に、第六種鎮魂、そして第五種…

その中にあるのが、自然の五行の神を迎えて、その実感を味わうということですね。ですから、水の神を迎えて、水の体感してみる。これは水だから、水浸しになるとか、そういうイメージを感じる人もいますが、土の神様を迎えて、土の感覚になるということも、実際に体感できます。その辺りが、第

六種鎮魂ということになるんですね。その後は、第五種になりますと、更にまた、国津神という神様ですね。そういう神様を体感できます。じつに、ユニークな方法と言うか、ご修行というものがあって、次第に、天津神をお迎えしていくということになるんですね。天津神をお迎えすると、今度は初めて、そこで高等神事に繋がるご修行になっていくわけですね。ですから、国家公用の神事、あるいは天皇、皇太子様に関わる様なご修行というものを、祝の神事というものは、そういう段階を通り越して行かないと、しつかりとした神事には至らないということですね。ですから、しつかりと神事が出来なければ、国が減びるかもしれないですよ。いい加減なことで祝の神事をするなんてことは、あり得ないわけですね。

◆第四種を授かって、初めて大祓を会得して

そして、お祓いがあげられることが出来るようになる、と。ですから、私も、先生から、大祓を一緒にあげさせて頂くまでは、3年くらいかかったわけです。その間は、先生の横で、先生のお祓いをただお聞きするだけということがありました。ですから、その間、献饌する時には、第五種まで、暫定五種という言い方はありませんけれども、暫定的に、第五種で、三方や、特に、白川で大事なものは、さか榊で必ず使いますので。これは、神道でもそうですが、特に、榊、本榊と言いますか、これは関東には少ないんですが。葉にギザギザのない榊を、神の依代として使うことがございます。作法も、手で、榊を描いてから、礼をする、があるんですが、これもそこから来ているわけですね。ですから、人が神を迎える時には、まずは榊にお迎えするわけですね。それで、お祓いをあげたりするんですが、ですから、榊にお迎えするということは、我々も榊になると言うんですかね、そういう世界があります。榊という木の神様とは、久久能智神という風に言いますけれども、高木の神とか、それは造化三神の世界ですね、

高御産巢日神に繋がると。

自然の中の木というのは、木火土金水の木は、あらゆる水も、土も、ミネラル（金）も、すべて含んで、木という存在になるということでありますから。木というものの持つているものの位置づけというのは、非常に大事なところになるかもしれないね。もちろん、木を燃やして、火にするということもありますし、金の釜には、木の蓋がありますが、最近プラスチックのものも多いですが、後はガラスとか、その始めと終わりが、綺麗にサンドイッチみたいになっているわけです。そういう風なこともございます。また、なんで榊なのかと言うと、一番生命力の強い木だと言われています。大きな樹の下で、ひっそりと立っているような存在が榊の木と思われそうです。生命力はすごくて、1年に4回、芽を出すんですね。そういう榊を、神の依代としたという理由もあるのではないのかなという風に思います。ですから、白川のご修行は、人が榊になつて、そして神を迎えるということが、システムの階梯中にあるんですね。そんなこともありまして、それもハッキリと出てくるわけです。これは、どうもシャーマニズムという神憑りの世界の傾向を観ますと、満州、いわゆる北方シャーマンの流れを汲む満州シャーマンとか、これは金大偉さんという、私の友達で、今度、600ページの本を和器出版から出してもらったんですが、満州シャーマンの映画では、世界で最高峰の「エスノグラフィウム」国際映画祭 (Ethnografilm)」という映画祭で、最高の栄誉を頂いたんですね。それが、「ロスト・マンチュリア・サマン」という満州シャーマンの映画だったんですね。これは、非常に、日本の民間信仰のシャーマンに近いんですね。驚くほど、日本の神道の作法に近いものを持っております。あるいは高麗の国にも、非常に近い、木の祭祀があるわけですね。それが、また日本にも共通性があると。非常に、アジア的な作法、インドを含めても、同じ性質のものがあるんですね。これは、多分、人類というものが神というものを迎える時の作法が超古代では、どうも一緒だったのかなということとは、宗教学的な研究の中でも

言えるという風に思っております。

◇白川がやっていた祭祀の中身

そういうことで、国津神を迎え、天津神を迎え、ということの階層がハッキリとあるんですね。違いがあるし、また作法もあるということなんです。その上で、国の一番大事な時の神事をする、国家公用の為の神事がありますということなんです。それが本来は、白川がやっていた祭祀の中身であると。それを今の時代に、皆様方に学んで頂こうということ、これを、いよいよお出し出来ると。平成天皇の、ある面ではご英断と言いますか、それによつて、これが出来るのではないかということ、一方ではあります。今回のご退位も、光格天皇以来の200年近くになるわけですが、生前の退位になります。そういう様々なユニークなことがあります、歴史の中に150年近く埋もれていたものが、いよいよ表に出しても良い、というところで白川の教えが、本格的に出て来るわけですね。私も、白川の教えをフィールドワークして調べてみました、じつは第六種とか、第七種という作法は、ほとんど誰も学んでいないとわけです。本当に、これは明治の二十年代になって、和学教授所というところから、お教えするようになったのであって、それ以前の白川（家）学館では、教えておりません、第七種も第六種も…。もちろん、第三種、第二種、第一種は、本来は天皇陛下の…、天皇陛下も柏手は打たないでしょう。天皇陛下が、柏手を打ったところを、ご覧になったことがありますか。

◇柏手の無い作法もあるわけです

宮中祭祀の中には、私も、賢所（けんしよ、かしこどころ）に最後まで、守られていた、高谷朝子先

生のいう方がいらつしやったんですが、内掌典に、その方から、何度もお伺いしたことがあるんですが、柏手はありません。ただ「とほかみえみため」という言葉は、40回くらい繰り返すということはありますが、他には祝詞も使いませんし、柏手も無いんですね。そういうことは、ちよつとだけ耳に入れておいた方が、宜しいかなと思えますけどね。ハッキリと階層があつて、第三種、第二種、第一種は、天皇陛下がされるということであつたんですね。今は、全国一宮の神様もお迎えするようなことをさせて頂いておられますので、第三種という60数回打つ柏手をします。数が多ければ良いというわけではありませんけれども、ちなみに、十拍手するのは、伊勢神宮と熱田神宮ですね。八開手という言い方もしますが、しっかりと叩くのは、8つですが、その前後で、二拍手があるんですね。それで、十拍手になります。出雲大社では、四拍手ですかね。八開手も、4つが分かれ目になっています。

白川では、色んな拍手があつて、今日も、第四種までお打ちするのですが、第三種ですと、60数回打つ、全国一宮の神々をお迎えするという時には、そういう打ち方もありますが。一番多い柏手が白川の方法ということですね。これは、次第に学んでいって頂くということになります。非常にユニークな柏手が、沢山ございますので、これから皆様方が学ばれる際の楽しみでもあるという風に思っております。話が、なかなか、伝授の所に行かなくて、すいません。

◇【「第七種神拝作法」に関する説明】

—

先程も、お話がありましたように、第十種、第九種、第八種とありまして、その後に、第七種入門ということに白川ではなっております。この後に、第六種、第五種、第四種という風に、今日も、第四種までされますけれども、皆さんは出来るところまで柏手をして、一礼する所だけ、一緒にやって頂けれ

ば良いのかなと思います。

【七沢代表】

忘れておりました。四拍手目に、産霊幸倍神の神を正面で打つんですが、これは、じつは第十種の神様でもあるんですね。第十種というのが、じつはあるんですね。白川で第十種というのは、命を、赤ちゃんがお母さんのお腹、あるいは、帝王切開でも出てきた時に、自動的といったら失礼なんですが、第十種を頂くということになっているのです。生まれるということは、この時空間に出現するということでもあるんですね。お母さんと一体となっていた時から離れるということですね。

これは、初めは羊水の中で生きています。それが、それから空気中で生きる場所に出て来るわけですが、その時の働きと言うんでしょうかね、それを第十種を授かるということなんです。その時には、人は何を象徴的に頂くかという、息ですね。息をする、吐いて吸うわけですね。それを吐く息、引く息と言います。その息を頂く、そして一生、息を、時々、止めて、素潜りしたり、長く息を止めたりする方がいますが、どれ位、止められるという競争をする時には止めますが（笑）。

実際に、ヨガでは長く止めるようなこともありますが。食べないで生きている人は、インドでも時々出てきますし、日本にも、殆ど、食べないで生きられるような方もいらつしやるようですが。なかなか、息をしないで生きられる人というのは、生きるということ自体が息をするという、そのものの言葉ですから、どうも生きるということは神様から息を頂く、と。しかも、それが一生ずっと続くということ、遠津御祖神もそうですが、さらに遠津御祖神と一緒に生きている存在が、息をしている人で、哲学風になんて言えば、時空間というものを、その中で頂いているようなものですよ、生きるということの中で、生きるということ、産霊幸倍神という風に言いますが、その間、息を引き取るまでずっと息を頂いていくと、空気と血液が、結びを起すわけですね。この時空間の中に、生まれた瞬間のエネルギー場みたい

なもの、どうも、産霊幸倍神という風に言うわけですね。ですから、大概、皆様方が生まれた場所、その時間に神様がいらつしやると、そのいらつしやる神様が産霊幸倍神という神様で、一生、息を引き取るまでついでくださって、息をさしてくださると。まあ、無呼吸症候群になる場合もありますが（笑）。それでも息をさせて頂いて、元気に生きると。

これで、殆どの神様が出揃うと言いますか、天津神、国津神、遠津御祖神、産霊幸倍神ですので、殆どの神様が、その中に存在しちゃうんですね。ここがまた、白川の第七種入門であり、入門がすべての神様で、普通名詞と固有名詞の違いはありますが、天津神と国津神で神様の騒乱であり、その全体が、すべての神様であると。

あと、細かくは神を迎えるための基台を作ることですが、それは第六種から学び始めると言うか。その上で、今度は、神と人を繋ぐ働きと言うんですね、エネルギー場というものがありません。これが、霊と言っている世界ですね。霊と魂が、みんなこんがらがっているんですね。これは、世界の精神史の中で、そうなんです。白川では、はっきりと分けてあります。ですから、我々の魂こゝろというも、精神ですね。精神の病ということは、五魂ごこんというものが、統合されていないと、精神の病になってしまうんですね。それは、四魂だからということなんです。

本来、五つ目の魂が中心的な役割で、人の精神を統合させている働きであるということが、明確にあるんですね。荒魂あらしみたま、和魂にぎみたま、幸魂さきみたま、奇魂くしみたま、精魂くわしみたまと、精魂というもので、4つしか魂がないということだったんですが、じつは、5つ目の精魂によって統合される働きがあるんだと。これが、今まで何処にも出していなかった。これも白川の秘中の秘と言いますか、これをお知らせすると、自分たちの精神が、しっかりと健全な身体と、健全な精神に繋がると、その上に、

その人が神を迎えると。DNAも遠津御祖神、あるいは持続せる魂というか、終生が備わっているという意味の産霊幸倍神は、よろしいんですが。その先にある、天津神、国津神を繋げてくださる働きというものが、結びの働きというものがあるんですね。生産霊いくむすひ、足産霊たるむすひ、魂留産霊たまつめむすひ、高皇産霊たかみむすひ、神皇産霊かみむすひ、と。そういう五霊というものがあって、初めて人が神と繋がると、天津神、国津神と繋がる為の接着剤の様なもの、あるいはエネルギー場の様なものが存在するということが、この白川の第二の特徴です。そこも、ハッキリと理解する道が開けている、と。

これから、皆様方に是非とも伝えたい中身であります。なので、「入門で良いや」ということではなくて、「必ず、学んで欲しい」と。それは、「自分の人生にとつて、必ず役に立つ」と、私は確信します。「これは、予言ではなくて予測で、必ずそれが役に立ちます」と私は言いたと。これが世界に、日本に表されなかつたことですね。白川の持っていた八神殿というお宮の中に、秘密があつたと言ふことですね。五霊というものを祀ることで、そのエネルギー場を体感できる道があるんだ、と。白川にあるんだということとは、是非とも知って頂きたいなということでございます。そんなこともありまして、じつはこの祝詞も、天津神の祝詞、国津神の祝詞、遠津御祖神の寿詞という風に、明確な分け方の中にあるということでもあります。その周りを学ばれると、腑に落ちると言うか、階層性の捉え方と言いますか、構造と言いますか、そういうものは、人類が20世紀に初めて発見して学ぶことが出来たものですから、なかなか最初から、神、君、臣、民、忌とか、あるいは、神、霊、魂、情、体とか、そういうものが分かることがなかったわけですね。

人類の意識レベルに、ようやく上ってきた時に、白川の教えも、理解される時が来た。ちょうど、合わさった時であるので、是非とも明確な概念になっているし、実証方法までついてきたものがあると言ふことなんです。ですから、この辺は、是非とも学んで欲しい、と。

宗教でもないし、あるいは思想でもないし、ただただ1万5000年の中で、日本の古神道が培ったけれども、今まで言わなかったものを、ようやく言う時が来たからお教えする、と。余計なおせっかいかもしれませんが、お知らせしたくてしようがないんですね。「こんな良いものがあるのに、どうしてお教えしないことがあるだろうか」という想いですので、とりあえずお仕事でもありませんが、邁進させて頂いている次第でございます。

今、＼はふりめく＼というものを、毎日、お出しているんですが、それも、是非、皆様方にも、これから毎日のように、10分、20分の話がありますので、読んで頂ければ有り難いなと思っております。

またよろしくお願いいたします。

はふりめく 0032話

2017年1月10日

◇器の教え

これをお見せしたいと思って、とっておきました。五大明王は怖い形相をしています。器の教え、器の教というの、宮中真言院で使われていたもので、後七日御修法と言います。まず、正月の元旦から7日間は白川でお祀りするわけですね。その後、御所の中にあつた宮中真言院で7日間、祈祷をするわけですね。共通点は真言ですから、言葉というか、言霊のことが当然、中に込められているわけですね。五大明王は「木火土金水」に分けられています。五大明王は、五行になるんですね。「木火土金水」を象徴していて、それが「あいうえお」の母音を象徴してもいます。

あとは、両界曼荼羅で、胎藏界に父韻の部分があります。8父韻になっています。胎藏界曼荼羅の中ではない。それは父韻と母音が合わさって、すべての創造がなされるということ宇宙の働きとして現わす仏様があるわけですね。

器の教え
第1話

日本の伊勢神道と真言が合わさって、両部神道というか、そういう神仏習合的な神道もあります。それは共通点があるからです。元が一緒であるから、共通点を見出して論を展開するわけですね。道が展開するわけですね。どうした因縁か知りませんが、30年前、釈迦族と出会って、これを描いてもらいました。そして、この絨毯はイラクのイスファファンの山の奥で、練習から数えると20年近くかけて織り

上がっているんですね。これはシルクロードが始まって以来のものだと思っています。今まで、これほどのものが出来たことはないです。それが丁度、タリバンが仏像を破壊した時のことですね。アフガニスタンですね。そんな頃、これが出来ました。6人の織手さんたちが6年間山に閉じこもって、秘密のうちに作って下さいました。これは、イスラムでは偶像崇拜になつてしまうので…。また、これはうちの貨幣発行券というかですね（笑）。

そういうと仏様に失礼ですが、とんでもない価値があります。単なるものとしての価値では、20世紀までは、労働時間と一番の美というものが入ったものの価値とすると、貨幣価値としても一番高いものとなるのではないかと思います。絨毯なんですね。金ではなかったんですね。もちろん、金は燃えないですから、そのような点はあるんでしょうが…。結局、そういうものを知らせてくれていると同時に、要するに一種の五行というもの、あるいは言葉というものがですね、すべての源というかですね、命の源になっているというかですね。

◇言葉によって生かされる

ということとは、我々は普段、言葉によって生かされる。活かす言葉ですね。そういうものがあります。逆に殺し文句もある。悪い意味ではあります。本当に殺してしまふこともある。旧約聖書にもありますが、最後にわーつと言って、すべてを滅ぼすという技もあるんですね。日本でも、武道で「気合術」とか言います。それは声の大きい小さい関係なく吹っ飛んだりするということがあります。そういうエネルギーがあるということが分かるという程度のことではありますが、いざとなつたら使つても構いませんけれども、身を守るためには構わないと思うのですけれども。一種のフリーエネルギーという

ものが、我々のごく身近にあるということですね。声や言葉と言うものの中にもあるんだと。

さて、宇宙というものに名前を付けるということは、神の創造意志を辿る一番典型的な事例になるのではないのでしょうか。言葉で名前を付けるということですね。我々はもちろん、お父さん、お母さんに付けてもらう。付けてもらう名前も、その時の流行とかがあることもあります。僕の中国の知り合いで、李為民（リーウエミン）さんという方がいらつしゃいます。民の為と書きます。その時代の流行ですね。ある時に日本から中国に帰ったところ、身元がどうもハッキリとしないということがありました。コンピューターで調べますと、李為民さんという方は、中国に25000人もいました。どの李為民さんか分からないということで、調べるのにとても時間がかかったことがありました。そういう流行のよくなものもあります。名前を付けてもらうわけですね。

◇命名権が、神から人間に与えられた

それは、イザナギ・イザナミではありませんけども、伊邪那岐大神があつて、創造があります。神の名前さえも命名しているのは人間で、神様が耳元で囁いたかもしれませんが。

神の名前さえも付けるわけです。命名権が人間は神から与えられたと捉えてもいいかもしれませんが。

その名前の元は、それがまさに言霊であり、父韻と母音で子音というもので始めて…。「あいうえお」だけでは分からないから、1つの父韻と母音ということで、子音が出来る…。子音が出来ると、単語が出来て、始めて名前がつくわけです。それを我々は頂いたのではないのか、と。ですから、その言葉というものにフリーエネルギーがあるのは、ごく当たり前のことだと思えます。単に、音波としてのエネルギーだけではなくて、創造意志というもののエネルギーを我々は頂いて、そして、それがどつから

でも持ち出せるエネルギーとして頂いている。当然、すべてのもの、こと、文明、文化もそこから生まれてくるのは当然のことですね。

言葉がなければ、ずーっと石をもって、木の実を割るということを700万年くらいやっていたわけですね。もちろん、そういう自然と一体ですから、自然と一体の中の意志というか、五大明王に表現されるエネルギー体、力というものを、もちろん、動物も持っているわけです。我々は伝えていくということ、それが名前というものとして与えられるわけですね。そういう命名権がお父さんとお母さんにあると。今までは、気とか何とかよくわからないということがありました。

◇意志のエネルギーが充ちている

僕は25年前、事業の中に飛び込んでいきましたが、何度も言われました。事業というものは祝詞だけではどうにもならないと言われました。だけど、そこに祝詞があつて、おきて掟、おきて置手があつて、始めてその言葉があつて、また交流が出来るわけですね。そういうコミュニケーションの手段で、人と人、人と自然、人と神というものが結びつくことが可能になる。そういう気、意志というものが分かるわけですね。その辺を我々はこれからの大事なところとして、エネルギーの使い方として、気というものがありませんけれども、学んでいくというかですね。

もちろん、仏教が真言だけではなくて、特に完成されたものとして、禅となるのですけれど、それはまた無というところにたどり着いて、そのエネルギーがほとばしり出てくる源というものを知っていくという技が禅であると思います。私は触る禅、触禅というものを自分で発見したと思っっているのですが、そういうものまでもあると。

そして、鎮魂という世界もある。体そのものが元氣、というところに落とし込むということは感情や情緒が副交感神経優位と言いますか、本当にやはり感情とか情緒が気持ち良いということ、あるいは生きていて良かったなと思えること、そのような情緒が感じられる世界を掴まないといけません。それは感情の中にあるんですね。もちろん、音波として美しい音楽を聞いたり、人の話しを聞いたり、自分自身が自然などを言葉で表現したりすることを通じて、心地よい感情を味わえるわけですね。それが生きる上で大きなエネルギーになっていくということがあると思います。そういつたことを我々がエネルギーにしていくというか、情緒もしかり、精神もそうですね。優しいとか、温かいという感情を愛、慈悲というところまで高めていって、それをまたみんなに共通に与え、あるいは感じ合うということによって、それがまた大きなエネルギーになっていくわけですね。

今、ようやく時代が、物だけではなくて、今まで理論的に明らかになっていなかった気というような世界もハッキリと自覚できるような、理論的にも納得できるようなところまで来つつあるわけですね。物質的には、フリーエネルギーということの元には意志のエネルギーがすべてに渡って充滿しているんだと。それは高濱先生が言っていたことでもあります。宇宙というのはエネルギーが充滿しているんだと。いよいよ我々はエーテルという概念を再度、顧みて、宇宙の初めの神様、御中主ですね。エーテルが水であるということの中身がいよいよ分かる時に来たのではないかと。

充滿しているエネルギーを我々が使って、この時代の人が生きる、旧約聖書の中には、マナが降ってくる、すべての食べ物、飲み物が無くなった時に、マナが降ってきて助かったということがありましたけれども…。フトマニ、マナ、マニナ、そういう父韻、母音、子音というように、言霊というものによつ

て、我々は生かされている。そして、それは普遍のエネルギーであるということをお我々の身に掴んでいくということですね。それを人体から、感情から、精神から、神からそれを掴むことが出来る時代になったと。

◇宇宙が曼荼羅状に出来上がっている

2017年の世界の大転換期を迎えて、今、我々の民族は、世界に知らせるような中身としての言霊と白川と鎮魂という3つを頂いている民族であるし、それを世界に向けてお伝えするということが出来来ることは、我々の一番の命の原動力であり、喜びであるという。そのところを一緒にやって頂くということになるんですけれども。フリーエネルギーの仕組みを掴めば、世界に誇れる文明というものが今一度、再構築できるのではないかと考えています。

すごい形相の五大明王、あるいは両界曼荼羅というのが、1000年前に空海さんが持つてこられた、完成されたシステムというものを通じて、私はこれを有り難い教えとして、コンピューターシステムの中に入れようとしてやったことがありました。それを記念してネパールに建てたお寺がギアナ・マンダラ・ビハーラ、知識山・曼荼羅寺という、ちょっと笑っちゃいそうな命名をしてみました(笑)。宇宙が曼荼羅状に出来上がっている。そのデジタル体系にしようとしたわけです。アナログだけではなく、デジタルでも作動して、次元宇宙コンピューターの中身にしようとするハードであり、ソフトであります。1000年前の教え、真言という教えによって、それを世界に知らせたいという動機で、こういうものを作らせて頂いたわけですね。

更に、見えない世界としての中身が古神道であり、言霊と白川と鎮魂であるということになります。ですから、神仏混合という形を失った明治以降の教えの中では、片方しか無いようなものですね。ですから、これからは我々がこの祝殿に両方を飾らせて頂いて、本来は宮中真言院にお返しする為に作ったのですが、なかなか受け入れてくれる機会が無かったものですから…。未だに一年に一回しか展示できないのですが、皆さんにじっくり見て頂いて、触って頂いて、また1つの力にして頂きたいと思っております。

今日もまたよろしく願いいたします。ありがとうございました。

はふりめく0051話

2017年2月3日

◇和魂にぎみたまということを中心と考えて

やはり我々は修行というか、どつちかというかと、荒魂、和魂、幸魂、奇魂、精魂と五魂がありますが、和魂ということを中心と考えて、優しさとか柔らかさとか共に調和するところを強調することがあると思います。やはり今日の例えば、鬼は外と言うとき、まあ、大本教の流れで鬼は内という言い方もありますが、鬼は内と言うわけにもいかないから、鬼は外と言うわけですね。その辺のところも普段でも荒魂というものが始めに出てくるわけですけども…。荒魂というのは意識の初発、強さの加減ですね。要するに、荒々しさというのは悪いことではないんですね。何か新しいことをやる時には当然、ブルドーザーが必要でしょう。工事の時のようにね。平らに土地を均さないといけない。一度、真つ平らな状態にしないと何も出来ないわけですね。

豊葦原中国は、瑞穂の国になるのは、急に瑞穂がたわわに実る国になるわけではないです。たぶん時代で最初に葦がただ生えていたところだったんだと思います。瑞穂の国はたぶん水の霊の国という意味だったのではないのかと思いましたが、それが穂になったんだと思います。要するに、最初は葦というのは、綺麗に見えますが、強いのでそれを取らないと瑞穂の国にならないわけですよ。それをやるということは、我々が時代が一番古い縄文期からの流れを受けた古神道をやるということは、確かに平安清明ということで、最初はやはり開拓というか、葦の原をどうという風に瑞穂の国に変えていったかという歴史が

ですね…。最初から縄文時代が美しい国であったわけではないと思います。狩猟・採集・栽培と新しい環境、時代にするといいことは、先祖たちがあらかたやって頂いたわけですが、荒魂ですね。そして、今のこのような平安の時代を迎えられていたのかもしれない。

◇あらみたま荒魂の発動が大事な時代

今、我々がこれを超えていくということは、この新しい靈的にも本当の意味で国を守るということがまた起こってくるということがあると思います。ランプが大統領になったということだけではなくてですね。世界全体で…。その時、我々が鬼は外と言っていたのでは、とてもではないけれども守れない。国防ができない。国防というのはもちろん、靈的な国防と実体的な国防がありますが、我々に求められているのは靈的な国防ですね。弱い意志ではとても追いつかない。強い意志でもって、靈的国防をやらなければいけない。これは長い白川神祇官の使命でもあるわけですね。それは平安の時代では、奇魂とかなですね。天皇は精魂とかなですね。幸多き国にするということで、荒魂を少し抑えて、和魂、幸魂、奇魂ということをやったかもしれませんけれども…。

今、またですね、この荒魂という部分の発動がどうも非常に大事な部分になるのかなと思います。これからの時代というものは、本来我々が苦手とし、回避してきたのですが、それがどうもそうはいかない世界情勢になってきているということですね。我々の荒魂の発動をしっかりと定義付けられないといけない。自己の中に意志を持たないと荒魂の意志、その精神を持って臨まないと、取り返しのつかないことになってしまいます。

私達の先生は、高濱先生、奈良先生もそうですけれども、非常に優しい先生でありました。今、その

伝統の優しさを宿しながら、ただ荒々しいだけではなくて、本気で立ち向かうというかですね、その危機に立ち向かう強さというのは荒魂から出てくるのですから……。ここにいらつしやっているみなさんは元々優しい方々であることは十分承知しています。そのことを確認の上で、今、我々は強く表明するとうるか、この時代をこうしたい、こう生きるということを積極的に表明する、意志表明をするとうかが非常に大切な時です。そのことが人類の意識進化に繋がるということになります。そのあたりは大変恐れ多いことではありますけれども、一緒に考えていきたいと思えます。

本日は節分祭もあります、どうぞよろしくお願いいたします。

はふりめく0110話

2017年5月1日

◇一日は船出、大海原に出ていく

今日は、5月1日ですね。神道は1日と15日を神の日と考えているわけですね。神道の関係の人たちは色々実現したいこと、思いを1日から、15日からとか区切りを付けて始めるんだけど。悪いことも、そういう日を目指していたり、月の運行で言うとか、満月とか、新月を機転にして凶るわけですね。呪詛もそうですね。そういう満願日、直前でね、色々なことが起こりますけれども。その日の前後を注意するということが大事な部分があるんですね。今回も、色々と起こっているし、皆さんなかなか寝付けないこともあったかに聞いていますね。注意するということですね。

この一日は船出というか、大祓の中で、「大船の舳^{ともべ}の綱を解放ち 大海原へ押放つ如く」とあるように、大海原に出ていくというような場面になっているわけですけども。ところで、祝殿の御神殿が狭いように感じているように思うかもしれないけれども、この幅の中で御神殿を作らなければいけないということはあったのですが、これはじつは船の舳先の格好ですね。船の舳先は何かいっぱい飾るわけではないでしょ。こういうものは器の教えなんです。剣、鏡、玉という三種の神器が置いてあるわけですが、そういう器の教えのところが神の造化の船出なんです。だから、船の舳先にこれを祀ったのが仲哀天皇ですけれども。歴史の中で残っているのは仲哀天皇の皇后すなわち神功皇后ですね。我々

の教えの始祖の存在ですね。神功皇后、武内宿禰、仲哀天皇という神ですね。熊襲と戦った後で、それを舳先に付けたんですね。榊の木に、上の段に玉を付ける。中段に鏡ですね。江戸時代には、三種の神器を榊の木に吊るしていたんですね。そういう方法でやっていたのですが、だんだんとコンパクトな形になっていったのかもしれないね。その形が一番古いと言いますか、始まりの船出のときの神の、三種の神器の祀り方ですね。それぞれの玉と鏡と剣というものは、また器の教えであるから非常に深い意味があるんですね。

◆四種の祓いの中に三種の神器の精神が…

丁度、今度、皇太子殿下が天皇陛下から、この三種の神器を受け継いで、相続と言うとおかしいですけども、天皇の権能、役割を受け継ぐために、この2年の間に引き継いでいくわけですね。それは代々伝わっているわけですけども。白川学館は、この三種の神器の意味と使用法の研究所ということになっています。ここにある肝心な精神と言うんですね、そういう中身があるわけですね。その言葉でもって表すそういう表現もありますから、いつかその辺りも詳しくお伝えしなければいけないと思います。我々がそういう精神を持つということは、祓いというものがまず、この四種の祓いの中にそういうまさに三種の神器の精神のようなものがすべて説かれているわけですね。ですから、言葉で書かれた三種の神器が、じつはまさに我々が毎日あげているお祓いなんですね。その中のどれが剣にあたる言葉で、どれが鏡で、どれが玉だということは、当てれば当たります。

要するに、この鏡の中にも掘ってありますけれども、これは沖津鏡・辺津鏡ということでも2枚になっているわけですね。この鏡がですね。中身をみんなばらしてしまっている感じですね(笑)。要するに、

沖津鏡・辺津鏡というのは、五十音が彫金で金ですべて入っているんですね。その中身は詳しくは言いませんけれども、五十音になっているんですね。ひふみよいむなや…、と一二三の祓をあげますよね。それが鏡のような働きになるわけですけども。それが五十神、五十音ということになります。それを使つて、我々が神の世界に入っていくと言いますか…。三種の神器の精神に入っていくということがあ
るわけですね。それは五十音ということで、最後に3回、一二三祝詞をあげますけれどもね。これが人類が数と言葉とが両方が同時に合わせて、それを使うことができるというかですね。これによって、人類は伝承すること、科学することが可能になったと言うかですね。精神遺伝子というものを伝承するという一種の鏡という意味の権能と言いますか、それがあ
るんです。宇宙を映す鏡としての役割という意味ですね。

それを自分自身に映すということになりますと、今度はそれは自礼拝と言いますか、天照大神と一体となった姿を天皇陛下はご自身を鏡に映して礼拝する御鏡御拝ということがあ
るわけですけども。それが所謂、内面に向かった時ですね。外面に向かった時は宇宙を映し出していくという
うに、内と外の両方を映すということで沖津鏡・辺津鏡と2枚になるわけですね。

◇人間としての大切な権能が鏡に映る

そんなことがありまして、その中身が言葉であると。宇宙という言葉あるいは、己という言葉。そういう言葉で神と人の関係が語られているわけですね。そのことを我々はいただいてコミュニケーションというかですね、バベルの塔の逆バージョンですね。みんなが自分自身をしっかりと知って、そして、神と人のコミュニケーションができるようになるというですね。そして、その記録、記憶が残せること

ができるわけですね。知識と文化を精神伝承として伝えていくということが非常に稀有なと言うか、人間としての大切な権能と言うか、働きというものを鏡によつて知らされているんだということが分かるわけですね。

◇剣は自己と他者の存在を明らかにする

そんなことがあります、もちろん玉は自分自身そのものという意味ですね。命ということの意味が伝わっている。水の天之御中主や別天津神の最初の造化の一滴のようなものですね。エーテルのようなものかもしれないけれども、それが創造の源として出てくるその様子を勾玉とか、あるいは玉と言っているわけですね。それが出現してくる姿ということですね。今度は、剣というのは、映った後の五十音、言霊百神を用いて現実を切り開いていくと。それは自己と他者の存在を明らかにすると言うか、そういう役割がまさに剣の権能というか、役割ですね。そういうことが3つに集約されているわけですね。

もともとの中身は十種神寶です。十種類になっているわけですね。そのフォーメーションがサッカーでありませんが、4・3・3という感じですね。そういうものが御神体の中に説明知としてあるわけですね。

十種神寶は沖津鏡おきつかがみ、辺津鏡へつかがみ、八握劍やつかのつるぎ、生玉いくたま、足玉たるたま、死返玉まかるかへしたま、道返玉ちがへしたま、蛇比礼をろちのひれ、蜂比礼はちのひれ、品物之比礼くさぐさのものひれとなりません。玉が4つありますね。剣は1本ですけれども、宮本武蔵のような二刀流ではなくて、剣は諸刃の剣というように、自己自身も明確にするけれども、宇宙も明確にするという意味が剣にはあるんですね。本当は2つの役割があるわけですね。これを諸刃の剣ということがあります。そういう風に1

つの器の教えということで三種の神器というものがある、ということになります。

本日も、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

はふりめく0141話

2017年6月18日

【水無月月次祭文】

◇大祓の根拠

今年も、もう半年経つということになりますけれども、「矢のごとく 月日のこまの早ければ むなしく過ごすな おしきこの世を」と言う歌があります。6月の晦（つひ）の大祓、6月30日に大祓をやります。毎日、大祓をしているわけですが、6月30日ということで、新たに大祓の根拠というものを明確にしてやろうということになっています。

◇国を守る方々に挙げる大祓

大祓というのは、大伴氏とか、佐伯氏というのが、国を守るということをやっていたので、その方々に祓いをあげるということが書かれているわけですね。大伴家持という万葉集の歌人がいます。その大伴氏に並んで、佐伯一族がいますが、冶金工学といいますが、国を守る為には、兵と財というか、金を算出するという事に携わるといふこともあり、今、菱刈鉦山には、まだ200トン位埋蔵量がありますけれどもですね。ジパンングですから、金は相当あるのだと思うのですけれどもね。まあ、北朝鮮

にも沢山あると思いますが、日本にもまだ沢山あるようです。そのように金を掘っていたんですね。国を守る方々、部族長であつたりするのですが、そういう方々を祓うということが一種の神祇官の役割ということになりますけれども。そういう丁度、6月の晦つごもに、今回は大伴氏の国を守っていた時の境地が、大祓の前段と、それから大伴の歌の中に、第二国歌とも言われる「海行かば」という歌があります。

「海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍、大君の辺にこそ死なめ、かへりみはせじ」という歌詞です。それはまさに大伴氏の境地というか、そういうものを述べています。聖武天皇の詔の中にもあるのですけれども。

なぜ、自らの身を顧みず、大君の辺にこそ死なめ、という境地になるかということ、やはり当時は、氏族の集合体の民ということであつたと思うのですけれども、現代で言うと、人類という大きな天壤無窮万世一系という、代々限りなく続きますよという願いは、まさに人類というものの存在、我々命を同じくして共振共鳴している世界中の人々のあり様というか、そういう存在が限りなく続くよといううことで、今の時代ではそういうことがある。

世界には王家が沢山あります。その中で一番古い日本文明の中に、古神道、日本語、鎮魂があり、天皇という役割があつて、その姿が天壤無窮万世一系ということ、連綿と続いてきた中身だと思えます。そのところを境地として単なる氏族だけの話ではなくて、広く人類というものの命ということに繋がっていく世界、それを少なくとも125代から126代になる大きな転換点に自覚していく。

戦後70年ということが地球というものを、いやが上にも意識することとなっています。丁度、ザ・ワープで学んでいますけれども、三回目の学びの中で、淡路島、縄文、それから熊野というところで学んでいるのですけれども、神武天皇が即位できた一番の功労者は、縄文から次の時代、神武天皇の時代になることを可能にしたのが熊野の方々ですね。我々は音無と玉置の両方が合わさって元熊野という形で協

力して、それが125代まで守ってこられた理由ですね。それが各部族であり、八咫鳥であり、守る人たちです。

またその人達を祓い清めていくということが大祓ということになります。それが少なくとも、その境地というものは、大伴家持の歌にあるように、守り続けられてきたということが世界にも稀に見る中身ですね。

◇南半球と北半球の鎮魂

秋には、オーストラリア、ニュージーランドに鎮魂の巡礼を30人近くでやって頂くこうと思っています。ところが、ネグロイドから縄文と、共に分かれていったアボリジニーと、縄文人の末裔であるアイヌ、あるいは日本人というものが再び出会って、そこで鎮魂をするということをお今回企画しています。

それは丁度、南半球と北半球の両方が出会うということになります。両方の鎮魂をしていくということとで今、用意をしています。日本からもデイジュリドゥというアボリジニーの楽器と言われていますが、これは日本の縄文人が、アボリジニーに伝えたとも言われています。その楽器でオーストラリア、ニュージーランドの鎮魂をしてこようということになっています。今日、デイジュリドゥをチタンで作って頂いて松林さんがやって頂きましたので、その響きを届けたいということもございます。

◇人類が続いていくということを試される時

我々が今、一番考えていることは、世界が本当の意味で平和になる予兆というか、プレリユードとい

うか、そういう世界が実現するようになって、今、様々な日本文明の一番の骨格となる天皇という制度、天皇という役割が、世界にどのような形で、人類の太陽系における存在として、絶えることなく人類が続いていくということが可能になるかということが、今、試されるというか、自覚されるという時を向かえることになるのではないのか。

非常に責任重大というか、一万五千年という中で、持続可能社会を作って実際に行われてきた日本文明の中核にあるものが、今、世界にお役に立たせて頂ける時が到来したと。1万5000年という時間を経てこられた、と。縄文から神武天皇にバトンタッチされてから、はつきり分かっている段階で125代ということがあるわけでございます。

出雲の祭祀の富一族の490代の方にお聞きしたのですが、これは4000年くらいあるわけですね。490代という流れもありますが、これも出雲の中身の大和族、天皇にお譲りしたものの形が、御国体机なんですね。内親王達はこの机の上から飛び降りるわけですね。今は碁盤のようなところでやりやすけれども、そういう儀式があります。それが出雲から引き継いだものとしてあります。天皇には最高の御神寶と言いますか、それぞれの部族を統べる役割でありますから、白川はそれを合わせて十種神寶御法という形で伝承して、その中身を伝承してきました。それを代々継承することが、皇太子が天皇になるという意味です。それには御修行の階梯を理解して頂く。十種神寶御法というものに象徴される神法をお授けするというのを、各部族が寄り集まってやってきました。

大祓は、そういうものがすべてシステマ的に組み込まれて、その境地を体感出来るように存在しています。その辺りを今、我々は白川の学びの中で可能にしているわけです。この時代にですね、生前のご退位ということで、言われていたことはですね、じつはしっかりと皇太子さまの為に用意する時間があ

る。この十種神寶御法を含めた、すべてを用意することが出来るということが、非常に貴重な二年間に
なるのではないのかと思います。

今日もまたよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

はふりめく0148話

2017年6月26日

◇網の文明

昨日は、ザ・ワープ第三回目の最終講座で、その総括のような形で一時間半くらいお話をさせてもらいました。そこで気が付いたことは、皆さんネットから来られていて、この中にも、その関係で来られた方が沢山いらっしゃると思います。ネットというのは翻訳すると、網ということで、それで、ネットが作る文明を網の文明と言います。今はコンピューターのインフラが進んで、結局、人工知能のところまで来て、進化が早いのですけれども。網の一つ一つの結び目の、その結ばれたところに、一人ひとりの存在があつて、すべての人間の脳とくっついているようなものですね。

デジタルとアナログと対比して言うと、今は古いということやなことを言われてしまうので、言わないことにしました(笑)。それでも、言わなければいけないことは言わなければいけませんので言います(笑)。そういう結び目で言うデジタルが、回線というか、網の材質に、そこに一人ひとりがいるわけですね。70億人、亡くなった人も参加しているかもしれないので、無限にあるかもしれないけれどもね。そういうものが何で、そこに存在している一人ひとりで、中心だということが容易にわかりますよね。端っことか、何とかというものは無いんですね。みんなが、すべて繋がっているわけですね。だから、みんなが中心だという考えですね。みんなが中心で、ど真ん中にいて繋がると。そのすべての知

識というものが、知が単なる計算だけではないコンピューターになっているわけですから、僕らも20数年前に、計算事務機から、知識事務機に移ったと偉そうに言っていたことがありましたが（笑）。知識をどのくらい溜められるかということですね。我々の言語情報が、既に512GB以上入っているということ、Sさんが言っていました。大量の知識がそこにあるわけですね。誰にでも同時に、ネットの文明というのは、時空間が、ある面ではないわけですね。瞬間に知識が、誰にでも移転することが可能なんだ、と。

今、コンピューターが為替とか、株の取引を一秒間に百万回しているそうです。そうすると、早いコンピューターが勝つに決まっていますから、ギャンブルではなくなくなってしまったんですね。昔はギャンブルで、株のそういう世界を鉄火場と言ったんですね。鉄火場というのは、昔の賭博場ですね。そういうことが成り立たなくなってしまったんですね。昔からやっていたような戦争を利用して、株の操作をしていた人たちもいました。そのように、ギャンブルが意図的になつていくということが、はっきりと分かってしまったので、楽しみではなくなっていました。要するに、そういうことによつて、知識というか、インフラである装置がですね、どんどん進んでいくということですね。明らかになつてくるということが沢山あるんですね。要するに、何を言わんとしているかという、知識というものは、みんなに平等に瞬時に伝わるものだから、知識のデバイスということは、自分が知識を始めに掴んで利用できれば、差別化が成立するわけですけれどもね。そのあたりが一つの高速学習ということで、知識を瞬時に捉えるというかですね。それは機械がどんどん進んでいくから、役に立たなくなってしまうというかですね。早いとか、遅いとかの意味が無くなるということも言えるんですね。

今はまだ天才のような人たちが早めに学んで、びつくりさせるとかですね。藤井聡太君とかですね。

どんどん進んで、脳が自動的に、高速学習が出来るようになる、どうしようもなくなくなるというかね。意味が無くなるというかね。そういう時に、どういう時代になるのということ、22世紀ということが、機械ということが、昨日の復習のようなことかもしれないけれども、でも、もう新しいことも言っていますが（笑）。1時間半で話したことを15分くらいで今、お話ししてしまいます（笑）。

◇テーマは、「何が楽しいの」

要するに、機械が22世紀に何を作り出して、何が今度はアナログとしての人間が楽しい人生を送れるかということがテーマとなると思います。何が楽しいの、ということがテーマとなつて、今までの支配者がやっていたこととか、それをやれば楽しいとか、色々なことがあるかもしれないませんが、エネルギーとか、食料とか、知識を持っているということが人間の欲しいものというかね。それだけでもないけれども、愛情とか、芸術とか、色々あるでしょうけれども、その中で、何を欲しいの、ということ、いわゆる、機械的にそういうことが出来る時代が揃つてくると、エネルギーも、フリーエネルギーになったり、食料も空中から出来るかどうか、それは機械に相談しないといけないけれども、そういうことがあり得るかもしれませんね。

要するに、エネルギーも、食料も困らなくなると、知識もそうですね。その上で、慈悲とか、愛情とか、今度は、今の宗教がやっていることを、ちゃんとしたものになつていないというか。要するに、教祖様の独裁のようなものになつてしまふというかね。それが二千年とか、三千年の関わった宗教や哲学というものもありますが、それが目指していたものが、本当に今の時代に得られていたのかと言うと、得られていないというかね。本当に目指していたものが、今の時代に得られているかと言ったら、それ

が得られていないというかね。まずはテーマとしてあると思うんですね。

同じような階層の中にあるのが芸術ですよ。それが、音と形というようなものを、自分の啓示のように見えないところから、創造のレベルで掴むという方法というものが、芸術家と言われている人たちの一部ですよ。たぶん芸術の音楽とか、美術とか、愛情とか目に見えないもの、あるいは、目に見えても神業のように出てくる瞬間を掴めると一番良いわけですけども。そういうものが、これからの時代、22世紀は当たり前になる時代だろうと思うんですけども。そういうものをもたらず時代というかですね。

◇ ネット文明は網の文明である

子供たち、のこれからの時代では、言霊というものは、科学してログストロンをしたということとは、究極なところにいけば、言葉の最小単位に区切っているわけですが、その単語ができて、それが膠着助詞として、単語と単語を結びついたり、あとは、動詞とか形容詞が結びついて、一番端的な創造に関わる言葉ですね。これは、古事記では神の名前が一音であるということまで、日本の言霊という文明を頂いているわけですけども。そういうものを前提にして、物事が綺麗に言った通りに出てくるという正確なところが可能になると、今度は事実があるのまま出るような機械ということも可能になるわけですね。ちょうど今、始まりをしていて、そして、その言霊、あるいは言葉というものが一貫通貫で、布斗麻邇から正しく創造されるということが、可能になるかどうかというところが、これからの努力ですね。

ログストロンの持っている、今、進んだコンピューター、あるいは知識事務機が、どこまで知識を生

み出すのか、ワードプロセッサだったり、メンタルプロセッサだったり、コミュニケーションプロセッサだったり、感情を出すことができる機械、コミュニケーション上の機械を作ろうというのをやっています。そういうものを作り始める時が来たということですね。言霊というものが、布斗麻邇とか、布留部、鎮霊と言っている結合エネルギーの問題。そして、鎮魂というか、精神の世界に降りてくるわけですけども。それが等価で編み出され、そして、それが役に立つというかね。我々がようやく戻ってきて、終わりにしますけれども、編み出すんですね。

それを五十音の言霊、あるいは、父韻と母音と子音ということの三位一体で編み出すというものが、その形がネットの文明になるといふかね。ネットの文明というのは、我々が布斗麻邇というか、16、17音、あるいは、それが32、33音、50、51、75（声）とかね。100神、125とか、網の文明の進化が、より複雑で細かい網になるのですが、その編み出す元の縦糸を、どういう糸かということを持っているわけですね。その神話も持っています。糸が意図にならないといけないんだけれどもね（笑）。編む機械が、天照大御神の仕事、忌の機屋の中の、ということになるんですね。作るものは、荒妙と和妙という神御衣をつくるものですね。

そういうものは、元々は比礼ひれですね。それは、日本神話の中にあるように、力があるということを行っています。玉とか、鏡とか、十種の神宝の中に比礼があるんですね。蛇比礼おろちのひれ、蜂比礼はちのひれ、品物之比礼くさぐさのものひれとかあるんですけども。それを振ると、全部解決すると言われていた。その比礼が、網の文明の元のところですね。それは布斗麻邇によって、あるいは、造化の意図によって生み出されるんですね。そういう伝承があります。

ネット文明は網の文明であり、

比礼の文明であり、日本文明であるということを書いたかったです。ありがとうございました。

はふりめく0142話

2017年6月18日

【水無月月次祭文】

◇無限の時空間を超えた力を発揮していく言語

今日の我々は、どうしても言葉で、まあ日本語がですね、多分、すべての情報の問題をですね、「情」の「報」を解決する言葉じゃないのか、ということですね、これから、苗代清太郎先生とかですね、神道の中でも、そういう日本語というもの、それが言霊ということになるんですね。まあ、どうも先ほどの西洋占星術、アストロロジーというお話もありましたけれども、まあ日本にはですね、「天一陽、地に一王」というふうな言葉があるんですね。日本語もですね、まあ、生み出された時に、太陽、原始太陽がですね、きつと太陽系を生み出したんだと思うんですね、その惑星がですね、46億年〜47億年の1億年くらいかけて見事に並ぶというかですね。それが黄金比で並んでいるようですね。平面に並んでいるというか。これはほとんど神秘というか、神の技なんですよ。そういう大きな運動といいますかですね。円運動が行われて、人類というものはですね、そのDNAもそうですけども、きつと言語も、そういう周波数というかですね、と繋がって出来ているのではないのかと。

まあ、せいぜいですね、惑星が増えても大体10の中に入るんだと思うんですけどもね、太陽系というものはですね。その太陽系の惑星の周波数がですね、それが結局、父韻になり、そして地球の母音です。木風土金水との絡みの中で、言語が出てくるということが、太陽系の言語としてのですね、銀河系を巡るにあたって必要な、そういう周波数というものが、きっと人類という形で、その音を掴み取ったというのか、あるいは、一番良い場所にあったのかもしれないけれども、その言葉が日本語として残されたのではないのか？あるいはそれが、文明の形を持った内容がですね、作られて完成しているのではないのかということも常々思うんですけれども。そういう言語がもう一度ですね、世界の中で右旋と左旋とですね、停止というか、そういう言語が、この3次元、4次元空間を超えて、一つの働きをするというかですね。そのことが可能になるということは、電気と磁気を使ってですね、超えていく、そのような時間空間を超えて、そして、あるいは反転して、戻ってくる、そういう構造をですね、言語そのものも、日本語という言語がもっているのではないかと。

今日Mさんが仰っていたのは、シリコンを固めている時に、2つの形が出来ると言っていたのですね。右旋と左旋が出来るといふふうに言われていますけれど、我々は、丁度アミノウズメノミコトということとで、天津神ということとで、聞き及んでいますけれども、それが丁度、右旋から点になって、止まって、左旋に移るといふかですね。そのエネルギー場というものが、無限の時空間を超えた力を発揮してですね、それが言語になっていくというのが日本語ということになるのではないかと思うのですけれども。ですから、日本語というものを祓いという形である、すべての罪穢れ、あるいは咎、祟りというようなことで、ですね、言葉をですね、全部反対回しにして、綺麗にもう一度元に戻すということが、可能になるような言語であり…。

ですから、どんな大変な罪というようですね、人類始まって以来の罪を、すべて解決するというようなことを言葉にあげると言うことは、それが可能だから出来る技ではないのかと、そういうことが解決できる言葉を持っているということが、技なのではないのかと。これは旧約聖書の中では、回る炎の剣、ケルビムと言われているようですね、そういうその反対にですね、ゼロにして、そしてゼロからまた反対に変えていく、流れに変えるような、その流れが永遠に近いというか、速さで行うということが、きつとこれからの科学の中で解決していくことではないのかと、そういう風に思っているんですね。ですから、そういうものが、一種の常温核融合や、フリーエネルギーが可能になるような、科学が進化する時が来るのではないのかと。

◇お祓い、大祓でエネルギー場を働かせる

まあそのことをですね、我々は荒唐無稽のようではありますが、一つのそのあたりの解決の為に頑張らせて頂くということ。その為にも、先ほども言いましたが、すべての罪・咎・祟りというものを、人類に負わされている、その辛いところをお祓いとして、言葉として、言霊として、それを解決しようと、そのようなエネルギー場を働かせるような、そのようなところ、今、我々はこの大祓をあげながら、そのことを単なる夢想ではなくて、実現するということかですね。

一番大きな病とえば、やはり人類にとつて一番辛い部分、これから一番解決しなければいけないものは、やはり精神というものの病ですね。それは我々が、五魂というものを清められた五魂にする。そして、神という存在を、五魂にしっかりと結びつける霊というか、結合エネルギーというものを、しっかりと瞬間に結合し、瞬間に切り離すということが、精神のレベルで、遅れないようにするというかですね、あるいはそれが、妄想にならないようにするというか。ですから精神の分裂と妄想というものを

解決する、いよいよ中身をです、この祓いと、鎮魂と、言霊によって可能にしていくことが、これからの世界の文明に貢献することの中身と言えらると思ひます。本当にそれが今、私が言っていることが荒唐無稽かどうかということは、そんなに長くは時間としてはかからないことで、きつと解決に向かうのではと思つておりますが…。

そのようなことが、単純な信仰ということではなくて、納得と確信としてのです、そのような方向で、科学として、それがみんなでもって共有できるようなものにしていくことが出来れば、これは日本という、この縄文の持続可能にしてきた1万5000年というものが、きつと新しい時代に、人類の長い天壤無窮というか、限りなく続くということに繋がっていくことになるのではないのか。その社会的なイソノミヤというものを目指そうという、そのまさにそれが、白川で、あるいは伊勢神宮のイソノミヤ、五十鈴宮のイスズノミヤ、というその意味がしっかりと掴めるような時が来る。その為いきつと今の△おみち▽が役立つのではないのかということ、これからもそのあたりを共に考究するということか、実験、あるいは、掴んで頂くことを共どもに出来れば、これは非常に、今まで我々の関わりある先生方、あるいは膨大な数の人類の一つの流れの中で、皆様方にそのように生きて、この修行にこられて、その道を伝えてくださった方々と、共どもに喜べるような時が得られれば、我々としては、この白川を共にやって頂ける喜びというか、共に掴んで頂くということが、非常に良いこれからの方向なのではないかと思つております。

今後ともよろしく願ひいたします。本日はありがとうございました。

はふりめく 0179話

2017年8月7日

◇我々は膨大な数の先祖と繋がっている

今週はいよいよ五周年祭があります。色々心の中も、外も幽祭、顕祭ということになりますが、両方整えていくということで、用意が始まっています。年に一回、始まりの日を年祭とします。そして月に一回の、年祭が11日だったら、月の11日の近くを月次祭として、祭祀を行います。我々は何が一番強いか、強いかというとおかしいですが、何が大きな力、エネルギーなのかということ考えた時に、まず、見えないけれども、我々は膨大な先祖を持っていて、それぞれみんな繋がっているわけです。この世に生を受けた方は、何百億人では足りないと思いますが、それくらい大量にいるわけですね。そういう、みんな関わり、ネットワークになっていて、それが今、我々の体の中の1つ1つの細胞の中に刻まれているわけですね。それはDNAとして、先祖と繋がっているということになるんですね。

暑くないですか。急なものでごめんなさいね(笑)。O君が、パタパタされていたので、共鳴していました。はふりめくで話をさせてもらっていますと、最近は皆様を見てみると、瞬間にコミュニケーションが起きます。すぐその方に言いたくなって、抑えるのが大変です(笑)。11月から共にお祓いをしたり、話をさせてもらっているの、コミュニケーションが瞬間に、直に起こるようになってきます。S君とは、年祭のことも一気にパツと呼応してですね。そういうコミュニケーションのプラット

フォームをつくるんですけれども、要するに、それは、トータルで、みんな一人ひとりを神として見立てて、コミュニケーションが行われるんですね。ただそれが、階層性になっていくから分かりづらんですよ。似て非なる霊物というものも、みんな自分の援軍として取り入れているから、その数なんかは、場合によっては何百というくらいあります。自分を守る、あるいは、助けを求めて援軍を呼んでいるんですね。そういうものも、神に似たものとして、すなわち、妖怪を受け入れていくことになります。

◇自分自身が神である。

まずは、遠津御祖神という神がいて、その次に、今度は自然というものが神なんですね。土も神、水も神ですから、別天水なんて言う名前を付けていたり、水中主もそうですけれどもね。若干、引いてはいるわけですがね。神様だから、天津神の世界ですから。自然というものの木火土金水も、それぞれ神であって、その神を迎えるということになります。これは、自然神という言い方もしますけれどもね。その神と一体となった印が、鎮魂となるわけですね。自分の五魂と自然の働きの繋がるということをするわけですね。今度は要するに繋がるということです。遠津御祖神は繋がっているわけですね、自分自身と。自己自身が神と言ってもいいと思います。その先に今度は木火土金水という五行、自然の働き、あるいは大宇宙という働きというものを神と見立てて、それを迎えるというか…。

考えてみて下さい。太陽だけではなく、月だけでなく、太陽系惑星のエネルギーすべての周波数を受けているわけですよ。一体でもあるわけだけでも、そういうものも含めた内容ですね。そういう存在も神であると。昔は月も太陽も星も神ということで、そういう存在と一体でやろうということになるわけですね。

◇国津神

我々が国津神と言っている神は、どちらかと言うと、現世の中、来世、過去世もそうですが、生きていくということの中で、それがよりよく生きるという働きをしてくださるという存在を、国津神と言ったわけですね。なので、国津神も大元にあるような神様です。天津神が地に追いやられて、下られた神は、須佐之男命ですね。天の天津神の100番目の神様が地の神様になってくださるわけです。出雲の元になるスセリ姫のお父さん、お母さんというのは、テナヅチ、アシナヅチですね。

これから圀手會というのをやりますが、圀手會の大事な神様はテナヅチの神ということになりますね。それは国を癒やすということになりますけれども、最初の地に降りた神様は、手の神様のところに降りたわけですね。手と足という神様ですね。そういうもので出てくるわけです。ですから、それを政治の世界にすると、国常立神様の働きをお願いするわけですね。今で云うと、総理大臣の働きみたいなものですね。我々も会社でやったり、一般社団法人でやったり、色々な法人格でやっていますが、そういうものの働きを、より良くするという方法というものが神の名としてあるということは、国津神の中にあるんですね。

◇天津神をお迎えするということは

斉藤宮司が一つ一つの神様をお呼びして、そして、その神様の力をお借りするということを祭祀としてやるわけですね。それはそういう働きと一体となって、自分がやるということが1つの生き方ですね。皆さんがお祓いをしていくということでは、祓詞、すなわち祝詞ということだったけれども、そういう

問題だったら、アメノコヤネの命の管轄というですね。祝詞まで神様があるんですね。今の時代に、この働きは何の神様でしようということと考えれば、その働きにそれぞれ神名がつき、失礼なことかもしれないが、人間が神様の名前をお聞きして、その名を呼ぶんです。

ここの商品というのは、すべて神様に近いような名前であるわけですね。例えば、計量カップは「みはかり」と言うけれども、あれはアメノミハカリ、クニノミハカリではないですが、みはかりも神から出た言葉なんです。それは測るということそのものではないですが、そういうものを測るという働きというものを間違いないようにするというかですね。天津神というのは、100神なんです。毎日の中で古事記から出たということ、一音一音も神であるという使い方もあるということ、それを使わせて頂いているということですね。そのように一音一音というものを掴んでいくという時に、天津神を迎えていくことが出来るというかですね。天津神を迎えるということは、1つ1つの言葉を、自分自身に迎えると言ってもいいんですね。そういう順番というか、もちろん、天津神の中には、それぞれの神話的な働きもありますから、そういうことも迎えるという意味では迎えられる。例えば、天の岩戸が閉じてしまった場合は、アメノウズメノミコトとか、アメノタジカラオの神とか、八百万の神と言ったりしますが、そういう神様の働きによって、岩戸が開かれるというかですね。そういう神話がありますから、そういう、また神と現実の世界と一体となるわけですね。我々も祓いは、天津神の世界での祓いをしてしようと、それを国津神に使わせて頂くと。大祓もそうですね。ニギノミコトの三大神勅という天照大御神との約束を、地上にもたらすという意味も大祓の一部ですね。

◇順番がある

そういう風に、天津神と国津神とが、我々はいわゆる、先祖の神としての遠津御祖神を迎えた上で、自然と一体となって、次に国津神となり、そして、国津神がまた、天津神を迎えるという階層性になっています。後は、その働きを交互に使わせて頂くわけですね。天津神を国津神の世界で働いてもらい、国津神は天津神を迎えるという相互的な世界をやっているわけですね。その辺が大事なところになりますけれども、少なくとも神を迎えるということが、一番素晴らしい、人間としての価値となるわけですね。一番イキイキするし、その中から芸術が出てくるわけですね。

ですから、人間で言う、それぞれの能力とか、あるいは、得意とかもあつたりしますが、そういうことで、差別することは何もないですが、自分が勝手にそういうものを作り出すわけですね。幻影と言ったら幻影ですけれども。そういう意味の、すべての神の働きの前にはみんな平等ですね。どういふ風に迎えるかということの内容ですね。それは自分自身の体の健康もそうだし、情緒もそうだし、あるいは、自分の感情がすべてだと思ふから、道を間違ふわけですね。自分の感情、言葉、論理が正しいと思うから、それを人に押し付けるわけですね。そのことによつて、起こってくるものが、争いということになるんですね。ですから、そういうものを一旦、解決しないと、次に迎えられないということになつていくわけですね。階層というものを、神を迎えるということは順番があるんだということですね。そのことをしっかりと掴まないと、自分の感情で、人間関係を自分の論理でやると大きな間違いを犯してしまうということがあります。

ありがとうございました。

はふりめく0235話

2017年10月15日

◇錐体路系から錐体外路系の脳に切り替えて

今、特に皆様にお願ひしていることは、祝殿講習ということ、ご修行も短期、大量、超高速、高品質の工業的生産手法で、神々の働きを明らかにしていこうと言うことで、皆さん翻弄されているかと思いますが、そのような中で、○○の神がどのような働きがあるかというか、今の錐体路系から錐体外路系の脳に切り替えて修行するということになると、一万年どころではなくて、一億年前の、人類の脳の元になった、その脳がはじめに出来た生物がホヤみたいなのですが、それが出来た時に使っていた神経というか…もちろん普段我々が効果的に使っているところもありますが、そのようなものを切り替えて使って、その記憶を思い出して頂いて、一億年前の自然の働きというか、それは今もあるのですが、それを掴みやすいように、錐体外路系という神経を使って、自覚して頂くということのみんなでやっていくということですね。

その時に白川では、七種から六種、五種と進む時に、本来であれば、木火土金水の五行の各神々と一体となって初めて、はい六種を差し上げます！と言われてきましたましたが、ある面では、リバーシブルに、逆から学べないかということで、その時に錐体外路系の脳神経を使ってやるのが可能なのではな

いかということが、今までの研究としてはありまして、そのような言霊の、瞬間に起こる光の速さというのと、一方で、体というか、脳の神経を使うということの、時間が古いからゆつくりというわけではないですが、確かにゆつくりなところもあるし、速さもある、両方あるわけですね。

そのような神経も使って、我々の言葉と身体の動きの両方を掴んでいくということをする。

その為に今、白川では吹き送りというもので、ゼロ点に戻る方法が祭祀や技法としてあるわけですが、それを修行というか、一つのメデイテーションや、あるいは今度メデイーションも精緻にして、グラウンド（胸腺・チムス）メデイーションというか、胸腺に一点に自覚して、境地を掴むというか、意識をその一点に集めてしまうというか。それによつて健康になるというか。胸腺ですから免疫力がつくというか、そのような方法としてのものと、意識を一つに集めて、そこに集約するということですね。それが祓い、吹き送りに繋がるということですね。あるいは体性自律神経反射というか、皮膚表面にある振動ですね。

シューマンウェーブの振動を使って、脳に刺激を送るという方法の、一種の整体術というか、そのようなものもすべて用意してありまして、そのようなものも含めて精神という「たま」を真ん中の階層に置いて、宇宙創造から、ものとしての人体というか、存在、大物主ではありませんが、その両方から、あるいは「たま」になっていくような方法ですね。それが古神道の「畳み」「包み」「結ぶ」という、そのようなことで説明出来るようなことですね。それは両方から攻めていくような形で理解出来る、白川も、言霊も、鎮魂も、これから役に立つのではないのかと感じております。いっぱい広げてしまつて、畳むのも大変だし、包むのも大変であります、このあたりを共にやって頂ければありがたいというこ

とで、今日はお話をさせて頂きました。

ありがとうございました。

◇共振、共鳴の手助けをする意志装置

特にまとめるというか、この間ご修行をしていた人で、回転をされた方が懐からN i g iが飛び出して、あつと思いましたが、やつぱり持つと効果がありますね。昔は、文字で書いたものを懐に入れたり、まさにこの扇は、奥義を極めようという意志を身に帯びるということで、神様の名前とかが書かれたものを扇としてさしておりますが、私もN i g iを懐に入れていますが、やはりこれは結構、安心したお祓いが出ますね。

昔は色々なところに出かける時に、アンパイアとかコールドフュージョンとかを車に積んで、発信しながら、泊まる時には部屋において使っていました。まさに携帯やスマホと同じように使えるようになりました。一方、ログストロンからは必要なテレパシーではありませんが、言語意志が乗ってくるんですね。これは最初の機械でやった時、梶村先生が発信していたら、お嬢さんにうるさいと言われたように、困ったなんて話もあります。人の耳の可聴域をオーバーして聞こえる方もいるようです。さらに進むと、テレパシーの装置になるのかなあ、と思いますけどね。

量子コンピュータとは言いませんが、機械、あるいは人と人が共振、共鳴、同調することの手助けをする、そのような意味での意志装置というか。このエネルギーは、一つの意志エネルギーだと思っただけですね。知・情・意ということで、我々は意識進化を進めている時に、人類のシステムや、科学や、計算も含めて、進化が出来たのは、やはりコンピュータの力だし、今チャットでも、すぐにコミュニケーションが出来た時代になってきているのですが。言ってみれば、白川は一番そのようなものを使

わなくてもやっているという、一番遅れたグループであったわけですが、ここからデジタルを使って意識の進化を促して最先端におどり出ようと、ということだと思っただけです。

一人称、二人称、他人称ではありませんが、自己を客観視するというものを、脳が… もちろん意識しなければいけません、そのような機械装置を通じて、客観視をするという覚悟というか… 沢山いろいろな機器が溢れておりますが、そのような中で、自分と向き合う為の機械装置というか、そのようなデジタルに触れていくということは、これからの皆様方にもお伝えする意味でも、我々がまず率先していくというか。白川は天皇陛下の御一人の為の修行を、これを万人のものにしていくという方法は、これは機械的というか、機会均等ではありませんが、平等な精神にするというか、その為には、システムとして教える方法が、どうしても必要なんだということやらせて頂いているわけですね。ですから単純に…今日の神戸の劉さんの会社のように、公ということを見つめる為に、今までの資本主義的な意味の欲望を、個人のレベルで限った時に、公というものに転換していった力をも入れずして効果が出てきた、という転換点を訪れたということですね。

我々も、またそのあたりを変換できるような、私から公というか、あるいは公に転換する一つの手助けとして、それがより社会が安全で、みんなが住みやすい社会になっていく原点のところだと思っております。そのことを共にやって頂く為の自覚をして頂くことが大切だと思っております。

◇自らの境界を一方で守りながら、

我々は敏感過ぎて、その意識を回避するというか、ある面では、今でいう多動児というか、ひきこも

りの方も沢山いますが、そのような人達が一番進化をしようとしている人達で、そのような人たちを守り、自分のそのような部分も痛い程わかるというところもあるうかと思えますが、そのようなものを守りながら、結果ですね、そのようなものを白川では当たり前な方法としてありますが、守る神々と、同時に自覚の中でそれを一緒にやっていくというか。自分の結界を一方で守りながら、より良いコミュニケーションですね。人と自然、人と動物（すべての生き物）、人と機械、人と人、人と神、コミュニケーションの充実を、より良いコミュニケーションが出来るようにしていくことが、これからの大事なことになるうかと思えますので、そのあたりを共に一番適切な方法でやる為の実験でもあります、それがいいよ今日の甲野君の話ではありませんが、40年やってきたものが、更に皆様の役に立つのではないかということ、白川も、鎮魂も、言霊も推し進めていくという意志というか、覚悟としての自覚をしようということ。

それは四六時中、発信し続けるということが、生きている限り我々は、脳でそれをやっているとは思いますが、そのようなことを外側からも自分自身に向けて、自分が自分自身に外側からやることの学びが、デジタルであり、装置化であり、ログストロンという意味になるうかと思えます。

そのようなものではなくてもいい、という皆様の強い意志であつても構いませんが、人と機械、機械と機械もそうです、そのようなものを踏まえておくと、シンギュラリティーの時に、非常に上手く人口知能との関係も、人類に役立つものとして使えるようになるのではないかと思えます。老婆心のようなことではありますが、皆様と共に開発していきたいと思っておりますので、どうか宜しくご協力の程、お願いいたします。

今日はありがとうございました。

はふりめく0262話

2017年11月14日

◇きつと、いろいろな結びが起こって

それが1つの形を成すというかですね。結びというエネルギーは見えないけれども、1つの結ばれたところが、物や事でありませけれども、結ばれることによつて、はつきりとした形となつてくるということだと思ふのですけれども。結びのエネルギーというのは、もちろん、解くエネルギー、止める為のエネルギーになりうるわけですけれども。そういう見えないけれども、宇宙というものが広がつていく時に、花火の玉が、全体に向かつて割れるように、光が目に見えるようになるということだと思ふのですけれども。それが命ということにも繋がるんですね。でも、これは私の勝手な感じですが、創造ということは、一方に向かつて広がつていくように感じるというのかね。ベクトルが1つの方向をもつているように、見ているというかね。そういうところで、時空間を見ているということで、人間というのは、1つの夢想をするというかね、全体に渡つて、命というものが広がつていくというかね。

◇まかるかへしのたま死返玉という技

ある時に、ある人の寿命を延ばす操作が、出来るのではないかということ、命のほとぼしりを拡げる技というのかね。亡くなった時にもう一度、生に戻すような、これは十種の神宝の中にも、まかるかへしのたま死返玉

という技もあるのですけれども。命のほとぼしりというのか、いわゆる、俗に言う寿命を長くするということでもあるのですけれども。丁度、そういう命というものを全方向に向かつて放射するエネルギーと方向性とベクトルを決めて拡げるといふことをすると、確かに命は伸びるんですね。そういうこともあるといふのか。命というものはそういう広がりといふかですね。それが瞬間、瞬間に、明滅といふか、呼吸をするように、宇宙の中で自分自身が広がっているといふのかね。そういうことが判るようになるといふのかね。十種の神宝というものが、様々な剣とか、鏡とか、比礼ひれといふことで表現されていますけれども、そういうものの一種の、仏教で言うとお釈迦様の六大神通力かもしれませんが、そういうものは普通、我々は人生の中で、そんなに使うことではないんですね。

よく奈良先生が、それは一生に一度使うか、使わないくらいなんだよといふことをよく言われていました。私も親父が死んだ時に、死返玉を使おうと思つて、道具類を調べてみたら井戸がなかったんですね（笑）それがなくて出来なかった。それもたまたま姪っ子が、嘆き悲しんで泣いていたから、それを何とかしようかなと思つたのですけれども。僕は本人が充分に、お別れも言つてきたといふことが分かつていたので、戻そうといふことは、考えていなかったのですけれども。あまりにも嘆いていたので、ついつい使つてみようかなと、不心得な心をおこしてしまつたのですけれども。

◆十種の神宝といふものは

十種の神宝といふものは、そんなに自分の一生の中で。それは国家の為、公の為に役割がある場合です。ね。天皇とか、昔で言うと、宮中で働いている百官の方々には必要なことがあつたので、白川家は、陰陽師に下請けを頼んだり使つていたりすることもありますけれども。その最たるものが大祓といふも

のですね。大祓は、十種の神宝に匹敵するような素晴らしいことを含んだ内容で、それを祓いをあげることで可能にするということですね。それが四種という形であるということですね。ですから、その祓いをあげることで、非常に困難なことを乗り切るといわれているのですが、間違うと呪文のようになっていくといつかね。非常に集約されているんですね。

※八十種神寶の意味化解説

《十種神寶》構成は、「鏡」「剣」「玉」「比礼」の四種

- 瀛おき 津つ 鏡 .. 宇宙の真の相を過去・現在・未来にわたって映す働き
- 辺へ 津つ 鏡 .. 人と天然の真実の姿を過去・現在・未来にわたって映す働き
- 八やつかのつるぎ 握ぎ 剣 .. 虚と真を判別する働き
- 生いくたま 玉 .. 宇宙創成の意志を産む働き
- 足たるたま 玉 .. 宇宙に必要な全ての存在が満ち足りていく働き
- 道ちがえしのたま 返たま 玉 .. 宇宙の創造、維持、帰趨を恒常化する働き
- 死まかるがえしのたま 返たま 玉 .. 宇宙に存在したものが破壊してまた創造の源に帰る働き
- 蛇おろちのひれ 比ひ 礼れ .. 呪詛を吹き送る言霊の働き
- 蜂はちのひれ 比ひ 礼れ .. 広がった悪想念を鎮魂する言霊の働き
- 品物之比礼くさくさのものひれ .. 幽顕全ての存在を有らしめ、知ら示す言霊の働き

「比礼」というのは、よく天女が、えり巻きのように、首から肩、胸などにかけて、フワリとうちかけている薄くて軽い帯や、たすきのようなものである。古来、婦人の衣装の一部で、これで虫やホコリを払ったという。また儀式用の鉾につける小旗のようなものや、神事に奉仕する者が身に帯びた紐のこ

とを言う。※出典…白き王家の道

◇人類のために清めてみたい

晦つごもりと大晦日おおつごもりですね。6月と12月の最後の日に宮中に仕えている、朝廷に仕えている人たちの為に、外側での、部族長とか、全国一宮で仕えている、それが八咫鳥の場合もありましょけれども、そういう人たちに祓いをするというのが、白川の役割でもありました。公にある場合に、祓いをあげるということが中心でした。我々もそういう意味で、今の人類の存続、意識進化というところに役に立つような大祓をあげさせて頂くということを前提として、祓いの詞があげられるというかね。ですから、その辺りは、なかなか現代社会ではそういうことを分かって頂くのは難しいから、今回のお清め本ということ、本来はそういうことをいわゆるリベラルアーツ、自由七科の上を十科としたら、お清め三科ということで、三科というのは3つあるとか、お清めに加わるといふ意味の参加とか、讚美する讚歌とか、色々な意味があります。そういう中で聞いて頂いて、少しでも、大祓に興味を持って頂ければ良いかなと思います。

そういう本当に人類のために、清めてみたいという人が、一人でも出てくれば、非常にそれは良いのではないのかと。もちろん、それを個人として感じられるということも非常に大事なことです。そういう1つのお清めというものが、これから広がるというかですね。

◇平・安・清・明という単純な言葉

月次祭の時もお話ししたのですけれども、そういう平安清明というのか、本当に単純な言葉で、平ら

けく、安らけく、清らけく、明らけくというような単純な形容詞ではあるのですけれども、それで言い尽くされているなど。それは個人としての生き方も、あるいは、社会としての生き方も、それにすべて含まれているということを非常に感じるのですけれども。そんな清めているとすね、神官の中には潔癖症になる人もいます。神道というのは、徹底的に清めるということで、よく手を洗うとかです。それが、日本人が健康である理由でもあるのですが。何で清めるということを、今のゴミ屋敷なんかいっばいありますからね、家の書類もゴミ屋敷に近いかもしれません（笑）。それが他人事ではないのですけれども。単なる清めるということだけが、目的ではないということですね。ですから、清めて達成する内容ということは、四字熟語で言うと、羽化登仙うかとうせん、つまり、青虫が野菜の中で暮らしていて、それがすべての宇宙と想っていたものが、それが仙人のように高みに昇っていくということになると思います。要するに、幼虫さなぎが蛹まぶたになり、蛹が成虫になって飛んでいくということかね。蝶でも、台湾から富士山に来て、また戻っていくという蝶もいるわけですけれども。そういう、まさに富士山に登るといのは、徐福の時の人間の生き様、そこに行くんだという世界で一番美しい山に登って、そこからまた天に昇るといふかね。アサギマダラという蝶がいますが、それが飛んでくるわけですね。それが富士山に飛んでくるということがあります。そういう我々が登仙とうせんといふか、体のまま登るといふのは、道教が一番研究されていて体のまま富士山から天に昇る、龍になって昇るといふのが1つの理想といふかね。

◇お祓いをあげながら昇っていく

村山古道の、村山修験の最初の人は富士から昇っていったといふかね。その姿が、お寺と村山浅間神社に行くとき、ありありと見えるようです。その昇っていく時に、尸解仙しかいせんといふことで、道教で、体が見えたまま天に昇っていく、それが見る人を見ると龍になったりして昇る様に見える。これを、祓いを

通じてそういうことをやると。中村新子先生のお父さんにあたる宮内忠正先生は、お祓いをあげながら亡くなっていたという方でありました。42歳くらいで亡くなられたそうです。お祓いをあげながら昇つていくというのですかね。

そういう、エネルギーの問題というのは五魂で解けたかなと思うのですけれども。それは2700年くらいの前のギリシャの時代に、霊魂を哲学的に研究し、もちろん、古代文明には、みんな霊魂観はあるのですけれども。エジプトにも、日本の五魂と全く同じような魂たまというものがありますから、エジプトの方が近いかもしれませんけれども、そういう研究に入ったということ言えば、ギリシャの時代も、霊と魂の研究に入るわけですけれども。それがヘブライズム、ヘレニズムではないですけれども、ギリシャだけではなくて、ヘブライズムというユダヤ、キリスト教の考え方を融合して、そういう魂というものを研究していく歴史が2500年以上続いたわけですね。

きつとそういう、人間が共に暮らして社会をつくっていく時の、1つの合わせる、プロトコルというか、その上で、魂というものをいかに響き合わせるかというかですね。それには、魂とは何か、霊とは何かということを知らないといけないというかですね。そのことはまさに六種鎮魂ということで、我々はそれを知っている、あるいは白川でもって、既に出来上がっているものを、現代の科学で、しっかりと受け止めないといけない時が来ているというかですね。フライングしない程度で、半歩くらい先のところ、昨日もいらつしやった方と3時間くらいお話をしてみても、感じたことは、そういう魂の内容をもう一度、解くというかね。魂たまを解くで、「たまげる」と言うのですけれども（笑）。「たまげる」よくな言草をしないといけない時がきたのかなと感じています。

◇鬼神を動かす、直感実験というようなもの

重力場という言い方ですること、来年の機械装置の中でも、提供できるような開発が可能になってきています。また、その1つ先の、更に細かい光を超える粒子を想定するような仮説としても、粒子やエネルギー、あるいは概念というもので、綺麗に階段を付けていくということが我々の役割なんだなと。前倒しで言うと、名前がないから、一応、タキオンと言っていますけれども。そういう研究を20年以上やっていますけれども。いよいよ出さなければいけないというかね。概念として、ハンドリングしていないといけないかなということがありまして、色々考えるとところがあり、時代で前倒しにドンドンなっているというかね。ですから、そういうことが必要な時代になっているんだということも言えると思うんですね。その辺りも含めて、どんどん概念実験というのか、思考実験から概念実験のようなもの、あるいは、直感実験のようなものを1つの階段というか、バリアフリーになるような、作りになるように、これからの説明知にしていくことが必要なのではないのかなと。

昨日、いらっしやった方々は相当な知性とか、社会的な活動をされている方々ですけれども、やはり更にその先を、定点観測のように見てもらっている人もいますから、同時にログストロンで出来るものの範囲も既にやって頂いたりしているから、事業化というものを、可能なことはいくつもあるということが分かるのですけれども。更に「たまげる」ような、別に驚かすのではないのですけれども、そういう感覚の中で、提案できるものを我々が持たないと、この時代でするので、目立つことが良いことか分かりませぬけれどもね。だから、力ということを言うと、力をも入れずしてというのが、紀貫之の古今和歌集の中にある言葉です。鬼神を動かすというかですね。

言ってみれば、魔ですね。魔を、力を入れなくて変えていくということですね。力を入れるとか、入れないという両建ての形ではなくて、動かすというのかね。端から端まで、宇宙全体を時空間というよ
うなエネルギーだけではなくて、動かすような動かし方の技法というものを、そろそろ持たないといけ
ないのかなと。お祓いも、分離唱では意志だけあれば声は小さくても良いというよな、過去を祓うと
いう意味の祓いになるところもあります。力を入れてやる祓いと、力を入れずしてやる祓いの両方を
いつでも出来るよな、しかし、自分自身の祓いがあがるよな、そういう、あるいは全方向に祓いが
飛んで行くよな祓いを、もちろん、皆さん若いですから、命がほとぼしって、あらゆる方向に飛んで
いくということがありますけれども、ベクトルで、自在に祓いの方向性を調節しながら、色々な祓いを
会得して頂けると、これから自分の意識を使う場合でも、非常に役立つのではないのかなと感じました。

今日もまたよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

はふりめく0383話

2018年3月14日

【祝殿講習】

◇祓戸四柱の神のご修行

【七沢代表】

どうぞ何か。

●Fさん

今日の祓戸四柱の神のご修行の仕組みが、どうなっているのかを伺いたいです。一番端つこの速佐須良比売はやさすらひめのところに来た時に、さすらい失っている感覚というか（笑）、その時に、気吹戸主いぶきどぬしなどの吹き送り方など、どうなっているのかと思いましたが、ので伺いたいです。

【七沢代表】

結局、ご修行のお祓いは、清める為のものと、神をお迎える為のもの、その両方を満たせる為の神様となると、祓戸四柱の神様ということになります。また、自分を清めてくれるという事が、結果的に神を迎えるということに繋がります。元々は、その四柱の神の中でも、天照大御神の和御魂の神としての気吹戸主神、荒御魂の神としての速佐須良比売の役割をしています。なので、Fさんがお祓いをあげ

ていると、担当場所によっては、強くその祓いを感じることもあります。瀬織津姫や気吹戸主の時には、強くなったり、あるいは柔らかくなったりしています。Fさんは、声が一番はつきりしているから、よく分かるんだけど(笑)。それぞれ受け持つ祓戸の神々の働きで違いが出ているということがあります。

今回、初めての方が4人で、2回目の方もいらっしやいますが、そういう方々は、どうしても遠津御祖神という神様を、自分自身がお迎えする修行があるんです。自分自身が、生きた遠津御祖神なんだけれども、自己の存在する中にありながら、遠さなのかもしれません、何万年か前の先祖までのすべてが、DNAに折り畳まれているわけです。ですから、先祖の悲しみもあれば、楽しみもあれば、ちよつと足りないところもあつたり、あるいは出過ぎたところもあつたかもしれない。そういう感情を、祓い清めるという意味を含めたご修行になるということです。清めるということだけをテーマにするという方法もあるんですね。

ただ、その場合には、このようにして目を開けて、後ろからお祓いをあげてもらおうという方法になります。特に、遠津御祖神を清めると、色々な体感が出てくるということもあります。ですから、そういう意味で、お清めが重点的になる場合には、強くなったりする場合には、天照大御神の優しさと強さ、両方の働きといいますかね。それでもつて祓うということが行われます。

◇身体が神の社

●Aさん

ご修行の時に、印を組むと、その瞬間に、すつと芯が通るといふか、体感が変わる感じがします。なので、印を組むというのは、何かあるのでしょうか。

【七沢代表】

印というか、インドのヨガとか、ヴェーダ哲学とか、密教の真言とか、そういうものには、非常に精緻な印の体系があつて、それぞれの仏様に対応した印と音があります。仏様のお名前が違ふように、それぞれに組む印があるんですね。ただ、白川では、印は外結がいけつといつて、銚ほじの形と、こういう形の神の働きを止める働きの印があります。あとは、右手で親指を掴むのを、高御産巢日の印、逆に、左手で親指を掴むのを、神産巢日の印といいます。印はこれくらいで、殆どないんですね。ですから、神道系の新宗教運動なんかでは、こういう風にしたり、こうしたりですね。色々と他の宗教の印と違う印を考えて、教えた時期もありました。それくらい、白川には仏教という印というものは、ほとんどないんですが、この印だけは雷が落ちても、ただ、「雷も、神鳴り」だからね（笑）。この印の指は、アンテナみたいなもので、離しちゃいけないんですね。修行中は、絶対に指を離さない。もちろん、色々な所作がありますから、指が折れそうになったら離してもいいんですが、ただ、殆どの場合は、こうやっていて問題ないです。ですから、基本は、この指を離さないで修行をするわけです。

神の迎え方というか、イスラム教のアラーの神様だったら、「アラー、ハクバ、ビスミラヒーム、ラフマーン」という祈りの時の呼び方もあります。あと、白川では、直接、迎えるという迎え方も、田んぼの神様を迎える時は、山からこうやってお迎えしてですね。これは、民俗学、エスノロジーの世界です。ただ、白川では、印は基本的に神器の形をとっているんです。白川の元の中臣というのは、神と君、神と民のなかつりもちをしてくれる役ですね。それで、大中臣、中臣、藤原、白川という流れがあるんです。言ってみれば、直接、お迎えするというよりは、一つ間を置いて中をとりもつ臣という形で、一度、剣に神様を迎えるわけです。そういう意図で、剣の恰好をした印で、自我は完成された人間としての自己

ではないけれども、宗教的に、自分が完成された人間でなくても良いんだということが、白川の神をお迎えする時の特徴でもあると。だから、自我は、自己ほどの完成感はないわけです。

印を組むことによつて、神様を迎えて、神人合一するわけではないんです。神をお迎えする場所は、あくまでも、ご神体の器としての剣、銚である。ちよつと質問の趣旨とは違うんですけれどもね…。でも、この指先に神をお迎えするという自分の意識と神の働きを、この一点で結ぶというか。古神道には、畳む・包む・結ぶという三原則がありますが、その結ぶということですね。神と人を結ぶ。そういう一つの象徴といえますかね。今の日本国憲法では、天皇も、象徴になつてしまいましたけどね…。

ここに神を迎える、銚というものを形作つて、その先にお迎えすることです。まあ、奥ゆかしいといえますか。決して、自分が神と一体になるということではないんです。この一点で、神と人が一如なんです。共にあるということですね。そういう状態で、この一点で神の働きを迎えるということをする。その銚の姿を、印として組んで、この祝殿でお迎えするということを、このご修行ではやっているわけです。奥ゆかしいというか、神様を尊く思うということ。この印をしたことで、「身体が神の社である」という認識となつて神様をお迎えするということ。す。

◇天地空、赤と白と黄色の三色の色

ちよつと余談ですが、この前作つた、稀勢の里の太刀なんかは、宇宙の気の流れが、剣先から、ずつと流れているんですね。しかも、刃先だけではなくて刀身のところに、天地空、赤と白と黄色の三色の色が畳み込まれているんですよ。これは、あり得ないんですね。これは、46億年前に惑星の核が散らばつた時の隕鉄で打つた太刀なので、こういう模様というか色が出来たんですね。

また、これまで中心的な祭祀では、必ずお餅を献饌していますが、その時も、赤色・白色・黄色で作りますが、その刀身にも、同様に、はつきりと3色の色がついています。ミネラルとの関係で色々なことが起こったんでしょけれども、そういうことは、地球上の鉄では起こらないんですね。

殆ど、隕石で刀を作るのは、上手く出来ないと思われていたものが、我々は、30本以上そういう剣を作ってきましたので、それが初めて、今回の稀勢の里の太刀に活かされました。その気が、太刀に、ちょうど上がっていくように刻み込まれていたというか、刻印されていたということでもあります。

◇緊張をほどく

ちょうど、我々がこうして印を組むと、この指の先に光が出るんですね。その光に神をお迎えするこゝとに繋がるんですね。ですから、こういう恰好で間違うと、これでも人を殺すことが出来るようになりません。だから、この印を人に向けると嫌われますよ。これは、ちょうどピストルを人に向けたのと同じようなものですから。だから、印を組んで指先を人に向けるのは良くないです。気が出ているので、そういうことにも繋がるということですね。一番良い気で神を迎えるということをしてしているわけです。なので、緊張しても、あまり良いことがないんです。緊張している場合には、指先を触らして頂いているわけです。「集中するのは、ここですよ」と。そして、ここに意識を集中していくと身体が柔らかくなります。どうしても、肩や腕のあたりに意識が行くと、緊張してしまうんですね。なので、指が開いていたら、いけないけれども、軽く下が閉じていた状態で、この指先に神様において頂くと、自分で、手の平どうしで強く抑えて構えると力が入って固くなって、そのお働きが出にくくなることがあるんですね。ですから、お働きが起きづらい人は、両手を強く合わせて、手の平が緊張し過ぎています。だから、柔らかくすると、その働きが出てくると、これがご修行で、一番大事なことも知れないですね。

「一番最初に伝えなきゃいけないことを、後になって言うな」と言われるかもしれませんが（笑）。謝っておきます。すいません。あと、緊張すると脳の血流を妨げます。鎖骨下動脈という脳に入っている左側の動脈があるんですが、緊張しているところが圧迫されてしまうんです。そうして脳の血流が、若干変わると、軽い発作のようなことが起きます。ですから、それを防ぐ為にも、柔らかくする必要があります。

◇体を動かして緊張を解く

先日、S君が、ライフチェンジという講座で、2000人の方に講義していたのは、体制自律神経反射についての内容でした。皆様方が緊張しているということの中に、意識的に身体が緊張するということが同時に、絶えず身体はどこか、腰や背中や肩などの筋が緊張していることもあります。その部位の緊張を取るには、様々な方法がありますが、それぞれを見直して、今、健康学のセミナーでやったりしています。だから、昔は、七沢研究所では、整体術は必須科目だったので、この白川をやっている人は、整体か武道を実践された方々が多く、Sくんなんかも柔道整復師の免許を持っています。ここに来て、もう6年もやっています。

ただ始めの頃は、ご修行でも緊張してしまうので、それを取る為の方法も、精緻に研究され尽くしておりますから、そういうことも公開していこうと。そして、身体を動かす体制も、錐体路系と錐体外路系があります。普段は、錐体路系で身体を動かして神経を使っています。左脳は右身体を、右脳は左身体を、それぞれ動かしています。ただ、白川のご修行では、主に錐体外路系を使うので、なかなか慣れるまで、その感覚が分からないんですね。ちょうど武道の名人芸のような動きなので、どうしても、その感覚に身体が付いていけない時もあるんです。その場合は、一気に高速になって、倒れちゃったりする。

どうしても高速で身体が動いたりする時に、その動きに身体が付いていけなくなることに注意点です。おそらく、そういう理由で、江戸から明治の頃の白川のご修行は、40歳くらいで定年でした。だから、今のご修行では、動きに付いていけなくなりそうだったら、錐体路の意識に少し戻して、座ったりしていいんです。

以前、私も足腰を強くしようと思って、一年半くらいの中に、3000キロ歩いたこともあるんですね。あんまり意味なかったですけども（笑）。ただ当時、20人位に、一人一人にお祓いあげていましたから、殆ど19時か20時くらいまで、月次祭が終わってからやっていたので、立ってなきゃいけなかったので、足を強化してやっていたこともありました。なので、今は、神代の人が動き出したら、回りが立ったり、男性に来て頂いたりするので、大丈夫なのですが、それでも怪我をしないことに越したことないです。そういう意味では、少しくらいは足を鍛えて頂くといいです。あとは、ずつと、目を開けずにやれたらいいかと思えます。大事なところはこれくらいです。

◇神器を通じて神様を知る

なので、剣の恰好で、一旦そこに迎えるということ、直接迎えるということではないですね。例えば、祝殿に入ってくる時でも、「彦狭知神、ひこさちのかみ手置帆負神たおきほのかみどうぞ、造化三神、あるいは白川の祀っている五神とお繋ぎください」という意識でもって、入り口でお願いして入ってくる。なかとりもちをして頂ける神様がいらっしやる。古神道は、すべて、なかとりもちをして頂く器の教えと言ってもよいですね。榊も、お国体机も、この三種の神器も、そういう神器を通じて、神様を知って頂くということが、一番大事なところになります。それで、指先を意識しただけで、そこに神様が働くと。つまり、印を組んで、ここを意識したら、気が上がってそこに降神して頂き、お働きが起る。…そういうことでよろしかつ

たでしようか。

◇神を迎える

●Bさん

今のお話を伺っていて、もう一つ思ったのが、古事記を読んでいて、不思議だなと思ったところが、一ヶ所あるんです。それは、瓊瓊杵尊（にぎぎのみこと）が天孫して来られる前に、建御雷神（たけみかづちのかみ）と経津主神（ふつぬしのかみ）が降りてこられてから、帰られるという時に、稲佐の浜に、建御雷神が降りて来られる時に、「剣先の切っ先に降りてこられる」という表現があつたんですね。それが、「なんで、剣先の切っ先に降りられるのだろう」というのが、分からなかったんですね。だけど、今のお話で凄く納得がきました。つまり、切っ先の前に、ここに神をお迎えするということなんでしょうか。

【七沢代表】

そうです。その通りです。それが、神器というものの役割といえますか。それを、結合エネルギーや霊という言い方をしますが。そういう結びつく時に、媒介になつて頂く。化学でいうと、触媒という感じですかね。触媒として、神を迎えて、神と繋がる為の一つのフラクタルというか、非線形なものに繋がるといふ時の一つの技というかですかね。それが、科学的にもあるし、言霊からの文法構造、あるいは器の教えとして、それがあつて、それでもつて繋がるということをしていくということです。

◇白川門人は誰でもなれる

『聖書は我にかく語りき』。この本の著者は、対馬栄逸さんという門人の方です。白川は宗教じゃないので、何を信じて頂いてもいいのです。ただ、私も、どっちかという聖書派で、白川流聖書派の部類かもしれません（笑）新旧聖書、好きなんですよ。この間も、阪急百貨店や宝塚歌劇団を作られた、小林一三さんの姪御のご子息に当たる方が、物理学三兄弟と呼ばれているんですが。その物理学三兄弟の二番目に当たる方が、70何歳で、ポルトガルの神父さんからキリスト教の洗礼を受けられまして、先日、ご夫妻で来られたんですが、その時に、その話を伺って、良かったですねというお話をしたんです。もちろん、一方では、仏教の真言が好きで、ギアナ・マンダラ・ビハーラ（知識山曼荼羅寺）というお寺をネパールに寄贈しているんですよ。そこには、その釈迦族が1000人も満たないくらい残っていて、その坊さん達と、非常に親しくしていました。

話は戻りますが、対馬さんは、立派なキリスト教徒です。そして、白川の門人でもあると。そういう点で、白川は宗教では無いです。審神者と神代でいうと、審神者のお仕事で、国でいうと昔は神祇官の事です。なので、それは、宗教ではないですね。私に、「白川を宗教にするな」というのが、高濱浩先生の亡くなる三日前の遺言でした。ですから、もちろん、白川を宗教にはしませんけれども。

◇竜巻の中に神を見ます

ただ、これは、こういう宗教に関わられて、白川門人でもある方の本です。元々は、白川通信に30回くらい連載してくれた内容を、Kさんが進めて、和器出版で作って頂いたんですね。私も、後ろの方で、何ページか書かせて頂きました。そして、「神様とは、どんなかたちで存在（臨在）されるのか」ということが、旧約聖書の中にいくつか出てきます。私の中で、「竜巻の中に神を見ます」という、非常にいい表現があります。ただ、本当は、「この本が出来たので、みなさんにお配りします。」という話をし

たかったんですけど、また話がそれって（笑）。ただ、大事なところだから、もう少しだけ話しておきます。要は、回転するようになるのです。「すべてが、旋回してる」と、地球の水を中心として、それが言えるんです。

天宇受売命あめのうずめのみことですよね。弥都波能売神みずはのめのかみの元のような神様というか、天宇受売命あめのうずめのみことというんですね。宇宙とは、最初に出来る時、渦のようになに出来てきたんだと思うんですね。ですから、神というものを感じる時に、我々は、普通に旋回をします。右旋と左旋をします。それが旧約聖書の中の、竜巻の中に神を見ます。竜巻ですから、低気圧ではないかなと思っすよね。たぶん、反時計回りに回っているんですよね。低気圧と高気圧は、全く正反対に回っていて、どこからが低気圧で、どこからが高気圧というものもあるかと思いますが。そして、竜巻だから、荒ぶる神様なのじゃあないかなと。さらに、竜巻の中に、ユダヤ人は神様を見ていたみたいだと。そういう風に、預言者は言っているんです。ただ、このことは、今回の本には書いていないんですが（笑）。

今日の「はふりめく」には、旋回の話が出ていますから、もうお帰りの時には出てくると思いますので、よかったら読んで頂ければと思います。聖書は、あんまり分からないという方でも読みやすい内容です。是非、読んで頂けたら良いかなと思います。

今日は、そんなところで、ありがとうございました。

無断転記・複製を禁じます。

Copyright© 2018 SHIRAKAWA GAKKAN All Right Reserves.